

弥生時代における生産と 権力とイデオロギー

Production, Power and Ideology in the Yayoi Period

安藤広道

ANDO Hiromichi

①はじめに

②水田稲作中心の生業システムと水田稲作により自然の超克を志向する世界観の形成

③弥生時代の集落群にみられる平等志向と中心形成志向

④おわりに

【論文要旨】

本稿の目的は、東日本南部以西の弥生文化の諸様相を、人口を含めた物質的生産（生産）、社会的諸関係（権力）、世界観（イデオロギー）という3つの位相の相互連関という視座によって理解することにある。具体的には、これまでの筆者の研究成果を中心に、まず生業システムの変化と人口の増加、「絵画」から読み取れる世界観の関係をまとめ、そのうえで集落遺跡群の分析及び石器・金属器の分析から推測できる地域社会内外の社会的関係の変化を加えることで、3つの位相の相互連関の様相を描き出すことを試みた。

その結果、弥生時代における東日本南部以西では、日本列島固有の自然的・歴史的環境のなかで、水田稲作中心の生業システムの成立、人口の急激な増加、規模の大きな集落・集落群の展開、そして水（水田）によって自然の超克を志向する不平等原理あるいは直線的な時間意識に基く世界観の形成が、相互に絡み合いながら展開していたことが明らかになってきた。

また、集落遺跡群の分析では、人口を含む物質的生産のあり方を踏まえつつ、相互依存的な地域社会の形成と地域社会間関係の進展のプロセスを整理し、そこに集落間・地域社会間の平等的な関係を志向するケースと、明確な中心形成を志向するケースが見られることを指摘した。この二つの志向性は大局的には平等志向の集落群が先行し、生産量、外部依存性の高まりとともに中心の形成が進行するという展開を示すが、ここに「絵画」の分析を重ねてみると、平等志向が広く認められる中期において人間の世界を平等的に描く傾向があり、多くの地域が中心形成志向となる後期になって、墳丘墓や大型青銅器祭祀にみられる人間の世界の不平等性を容認する世界観への変質を想定することが可能になった。

このように、物質的生産、社会的諸関係、世界観の相互連関を視野に入れることで、弥生文化の諸様相及び前方後円墳時代への移行について、新たな解釈が提示できるものと思われる。

【キーワード】 弥生文化、人口、生業、社会、世界観

①……………はじめに

本稿のタイトルは、今回の共同研究の題目の頭の部分を「弥生時代」に変えただけのものになっている。かなり大きな風呂敷を広げてしまった感もあるが、敢えてこのタイトルにしたのは、共同研究の題目が、これまで筆者が弥生時代の研究で目指してきたものを表現するのに、ピッタリとは言わないまでも、かなり近いと考えたためである。

もちろん、「生産」と言っても、筆者がこれまで取り上げてきたのは、人口そのものをはじめ、水田稲作と畠作、石製・鉄製利器そのものとそれらを用いた生産活動といった、物質的生産の部分に過ぎない。また、「権力」や「イデオロギー」に関しても、筆者の研究は、当時の「社会的関係」や「世界観」の一側面に触れた程度のものである。その点で、本稿の内容が、タイトルからイメージされるようなレベルに達しているか、正直不安がないわけではない。

とはいえ、筆者がそうした研究に取り組んできたのは、それらが弥生文化を理解するうえで、きわめて重要な意味をもつと考えてきたからである。例えば、水田稲作や利器に関連する諸活動が、弥生時代の特に東日本南部以西における諸地域の社会のあり方、及びその変化ときわめて深く結び付いていたことは間違いない。筆者は、これらの諸活動についての検討を通じ、中期以降の東日本南部以西では、人口の再生産を支える生産諸活動が、複数の集落からなる地域的な社会構成体（地域社会）の存在を不可欠としていたことを明らかにしてきたつもりである〔安藤 2003：77-97 頁〕。また、弥生時代「絵画」の構造分析の結果は、弥生時代における生業のあり方や人口、社会の変化に、当時の世界観や時間意識が密接に関わっていた可能性を示唆するものになったと考えている〔安藤 2006 a：66・67 頁〕。

弥生時代における地域社会の顕在化、及びさらに上位の社会的関係の形成は、拡大した社会的関係の維持と表裏一体となった、個々人の欲求や思考に対する制限や規制の拡大と結びつくものと考えられる。だとすれば、そうした制限や規制の生じる場に焦点を当てることで、当時の地域社会、地域社会間の社会的関係について、「権力」〔溝口 1999：35-40 頁〕という言葉を経絡して論じることにも可能になってくるはずである。また、筆者が弥生時代「絵画」から読み取った世界観や時間意識についても、物質的生産及びそれを支える社会的諸関係と絡み合う様相を掴み取ることができるのであれば、それを唯物史観的な意味において「イデオロギー」と表現することは許されるだろう。

本稿では、題目の3つの言葉について、これ以上の概念の整理をせずに、権力についてはやや特殊な意味で、残りの2つは主に国語辞典レベルの一般的な意味で用いることにするが、それは冒頭で述べたとおり、本稿のタイトルを敢えて共同研究の題目にすり合わせたためでもある。筆者の関心事は、弥生文化の諸様相を、物質的生産、社会的諸関係、世界観という3つの位相の相互連関において理解することにあり、その3つの位相を「生産」、「権力」、「イデオロギー」という言葉で代表させてみたというわけである。

そこで以下では、これまでの筆者の研究成果を基に、はじめに水田稲作技術を中心とする生業システムの变化と人口の増加、「絵画」から読み取れる世界観の関係について論じ、次に集落遺跡群の分析及び石器・金属器の分析から推測できる地域社会内外の社会的関係の変化を加えることで、

東日本南部以西の弥生文化の諸変化における、「生産」的、「権力」的、「イデオロギー」的側面の相互関連の様相を捉えていくことにする。

上記のように、本稿は、これまでの筆者の研究の中間的なまとめとして位置づけられるものである。そのため、多くの記述がこれまでの研究の繰り返しになっている。また、論点がきわめて多岐にわたるため、弥生時代研究者にとってある程度共通の認識、あるいは常識的な知識になっていると判断される諸見解や事実関係については、細かな説明、引用を省略させていただくことにした。併せてお許しいただきたいと思う。

②……………水田稲作中心の生業システムと水田稲作により自然の超克を志向する世界観の形成

1) 水田稲作中心の生業システムの形成と人口増加

a. 日本列島における稲作技術の初源をめぐって

日本列島における水田稲作技術の定着と展開を論じるにあたっては、まず縄文時代における稲作技術の存否から論じなければならないだろう。

現在、稲作が縄文時代に遡ると考える研究者は少なくない[藤尾 1993: 52-54 頁, 広瀬 1997: 30-34 頁, 宮本 2000: 122-124 頁など]。こうしたなかで筆者は、現在までのところ刻目突帯文土器の時期を遡る確実なコメの証拠は存在しない、との批判的立場を取ってきた[安藤 2007: 439・440 頁]。しかし、筆者自身は、確実なコメが確認される可能性について目を閉ざしているつもりはなく、土器圧痕のレプリカ法や遺構覆土の水洗選別には大きな期待をしているし、かつそれを議論に組み込む準備もできている。

こうした状況において、仮に縄文時代のコメの存在が実証された場合、我々研究者に求められるのは、そのコメをめぐる考古学的な諸状況を細かく検討し、縄文時代の食糧生産全体のなかで評価する姿勢を貫くことである。コメの存在の実証といっても、例えば数点の圧痕が確認されただけでは、そこから稲作技術の存在までを論じることにはできないはずである[佐原 1968: 7 頁]。仮に稲作が行われていたことを想定するにしても、まとまった量のコメの検出例がなければ、食糧生産全体におけるその役割はごく小さかった、あるいは偶発的に試みられた程度と考えるのが妥当であろう。

一方、耕地に目を転じると、縄文時代の稲作技術の存在を積極的に評価する研究者は、焼畑を含めた畑作を想定することが多いようである[広瀬 1997: 39-43 頁, 山崎 2003: 65-67 頁など]。確かに、焼畑は、日本列島のような酸性土壌地域で有効な耕作技術のひとつである。しかし、以前指摘したように、イネは陸稲とされる品種であっても、他の雑穀類に比して根系の深度が浅いため[小柳 1998 など]耐乾性が弱く、降水量 1500 ミリ前後の温帯地域の乾燥耕地における稲作の想定には無理があるように思われる[安藤 2007: 440 頁]。西日本の縄文時代後・晩期の遺跡で多量に出土する打製土掘具を、焼畑を含む畑作の根拠とする意見も根強いが、焼畑で打製土掘具が多量に用いられていたとの想定には大きな問題があり[佐々木 1971: 54 頁]、耕起を伴う畠を想定する場合には、乾燥耕地にきわめて不利な日本列島の土壌条件[松中 2003: 267 頁]をどのように克服していたの

かが問われることになる。後述するように、日本列島の初期稲作技術が、降水量の少ない渤海沿岸地域を経て伝播したことを考慮すれば、その耕地が乾燥耕地であった可能性はさらに低くなるはずである。つまり、仮に縄文時代に稲作技術が存在していたとすれば、それは当初から水田であったと考えなければならないのである〔安藤 2007：440 頁〕。

ところで、筆者は、弥生時代～前方後円墳時代の水田稲作技術を、「自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田」と呼ぶ、ひとつの系統の技術と理解している〔安藤 2007：432 頁〕。この技術の特徴は、ほとんど耕地の造成を行なうことなく、1% 前後の視認可能な微傾斜を利用して水の管理を行う点にある。誤解がないように述べておくと、筆者の言う「灌漑」は、人工的に耕作面の湛水・排水を行う技術の総称である。「自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田」の最も重要な特徴は、視認可能な自然微傾斜、あるいはその末端部分に小区画の畦畔を形成することで耕作面の湛水を維持・管理する点にあると考えている。そこには耕作面の条件に応じた多様な水の管理技術が伴っており、水路と堰は、必ずしも全ての水田が備えているものではない。例えば、台地縁辺や扇端部の湧水等に近く、微傾斜面に畦畔と床土を形成すれば耕作面の湛水が可能になる場所では、水路や堰が不要となる場合もあるし、そうした水田に隣接して水路と堰を備えた水田が存在していても何ら不思議ではないのである。

仮に縄文時代に稲作技術が存在していた場合、筆者は、同様の自然微傾斜を利用した水田を想定せざるを得ないと考えている。水田は、施肥や深耕等の高度な土壌管理技術をもたなくても、継続的なコメの生産が可能な耕地である〔松中 2003：251-254 頁〕。また、自然微傾斜利用の水田では、耕地の形成に大きな労働投下を要せず、縄文時代の石器・木器の製作技術、土木技術でも充分導入が可能なことから、小規模経営であっても非効率性が際立つことがなかったと推測できる。さらに、地形的に複雑な様相をもつ日本列島では、小規模な水田を形成し得る程度の条件をもつ地形であれば、集落の近隣で容易に見つけることができたはずである。朝鮮半島南部における稲作技術の定着・展開の時期が問題として残るが、仮にそれが縄文時代後期・晩期併行期に遡るのであれば、九州地方を中心とした後期・晩期の集団が水田稲作を試みるものがあつたとしても不思議ではなくなるわけである。

ただ、現在に至るまで確実なコメの存在が確認されていない点を重視すれば、仮に水田稲作が行われることがあつたとしても、それが継続性をもって生業システムのなかに定着していたと考えることは難しい。コメは長期保存をすると発芽率が下がるため、生業システムの中に定着するには、継続的な生産が不可欠となる。縄文時代後期・晩期において、水田稲作が行われたことによる、物質文化や集落の変化を見出すことができない点からしても、その生業システムのなかの比重を過大評価することは避けるべきであろう。

一方、こうした不確実な縄文時代の稲作に対して、北部九州地方の刻目突帯文期になると、確実な水田址をはじめ、コメそのものの確実な出土例、水田関係の耕作具とその加工具等の稲作技術定着の証拠が急速に増加する。それとともに、土器や集落の諸様相などに、朝鮮半島南部の無文土器文化との関係も明瞭になってくる。その後の物質文化、集落、生業、社会の変化からみても、この時期をひとつの画期と評価することに何ら問題はないはずである。もちろん、刻目突帯文期を遡る時期に水田稲作技術が存在していた場合には、刻目突帯文期以後との関係を慎重に評価する必要が

あるが、先述のようにその技術の継続性には疑問が残り、当時の文化・社会への作用もごく限られていたと考えられるため、ひとまず議論の外に置いて大きな問題にはならないだろう。なお、中国・四国地方以東でも、刻目突帯文期に併行する時期からコメ圧痕を中心とした確実な稲作関連資料が認められるようになる。これも、それ以前の稲作技術が残ったものではなく、あくまで北部九州の刻目突帯文期における、水田稲作技術の定着に関係するものと考えておく。

b. 東日本南部以西における水田稲作技術定着後の人口増加

以上のように、日本列島における水田稲作技術の継続的・安定的な定着は、北部九州地域の刻目突帯文期以降のことと考えて差しつかえなく、依然、弥生時代の開始を議論する際のこの時期の重要性は変わらないことになる。もちろん、水田稲作技術の定着は、短期間で一様に進んだわけではなかったようである。北部九州地域であっても、水田稲作技術の受け入れ方には、地域差のみならず遺跡差すら認められることが指摘されている[藤尾 1999: 78・79 頁]。その後の東方への水田稲作技術の伝播にあたっても、河内平野における遠賀川式と長原式の棲み分けや共生の想定[中西 1984: 126 頁, 秋山 2007: 59-63 頁など]など、水田稲作定着初期において、その受け入れ方に集団ごとの差異が生じていた可能性は高い。さらに、近年の弥生時代の年代観の修正により、刻目突帯文～遠賀川式の時間幅が従来の想定よりも長くなる可能性が高まっているが[藤尾・他 2006: 26 頁], だとすれば、こうした不均質でモザイク的な水田稲作の定着状況が、比較的長期にわたり続いていたことになってくる。

しかしながら、このような不均質な水田稲作の定着状況が続きながらも、水田稲作技術の定着からしばらくすると、東日本南部以西の各地で人口の増加現象が生じ始める点[石川 1992: 128・129 頁]には注目する必要がある。そして、こうした人口の増加とともに、水田稲作の受け入れ方の不均質の状況が解消され始め、前期後半から中期の急速な人口増加を経るなかで、多くの地域において水田稲作を中心とする生業システムが確立していく。

北部九州地域における刻目突帯文期から中期にかけての人口増加の様子は、小澤佳憲氏によって詳細に整理されている[小澤 2000: 27 頁]。それによると、北部九州各地で、水田稲作定着初期から緩やかに人口が増加し始め、前期後半から中期にかけて爆発的な増加に転じることがうかがわれる。

九州以外の地域ではこうした人口の計算が試みられているわけではないが、各地で行われている遺跡数の集計から、ある程度の人口の推移を推測することが可能だろう。例えば、吉備地域の遺跡数の集計結果をみると[考古学研究会岡山例会委員会編 1999: 260-267・272-295 頁]、刻目突帯文 1 期 16, 同 2 期 30, 前期 1 期 8, 同 2 期 43, 同 3 期 42, 中期 I 期 16, 同 II 期 54, 同 III 期 152 となる。刻目突帯文土器との併行関係に問題が残る前期 1 期と、集落遺跡の様相がよく判らない中期初頭において遺跡数の減少が見られるが、前期のうちに遺跡数の漸増が認められ、中期後葉に急激に遺跡数が増加する。

また、近畿地方では、大和地域の遺跡数を例にとると、縄文時代晩期末 58, I 様式期 57, II 様式期 38, III 様式期 61, IV 様式期 69 という変遷を示す[大和弥生文化の会 1995: 54-131 頁]。ここでは、大規模集落の形成期である II 様式期に遺跡数がやや減少する以外は、遺跡数自体に大きな変化

が見られないようである。しかし、そこに経験的に把握可能な各時期の遺跡の規模や遺構・遺物の数の差を加味すれば、概ね時期を追って人口が増加していること、特に中期に増加率が著しく高くなっていることを読み取ることが可能となる。一方、大阪平野では、前期前半 27, 前期後半 60, 中期前半 77, 中期後半 100 と、時期を追って遺跡数そのものが増加しており [三好 1999 : 9-16 頁], 山城地域 [伊藤 2005 : 285 頁] も同様の推移を示す。その他の近畿地方各地の遺跡数の推移についても、大和弥生文化の会発行の『みずほ』誌上で概ね把握することが可能である。これらのデータをみる限り、細かな地域・時期によっては遺跡数が減少する場合があるものの、近畿地方全体で見れば、ほぼ継続的に人口が増加していたと考えて間違いなさそうである。

関東地方や中部高地などの東日本南部では、前期後葉における水田稲作の定着ののち、中期前葉まではそれほど顕著な人口増加を示す地域はみられない。その点で、西日本各地の様相とはやや異なるようであるが、中期中葉になって特定の地域に大規模な居住域が突如として現れ、中期後葉には集落遺跡数の急激な増加が生じていたことが明らかになっている [石川 2001 : 75-84 頁, 安藤 1998 : 24-27 頁など]。

こうした人口増加がみられる地域には、南関東地方のように、人口増加後の遺跡が、水田稲作技術定着以前に比して文字通り桁違いの数に達する地域も存在する。また、大和地域のように遺跡数にそれほど大きな変化がみられなくとも、想定される居住域の規模の差が桁違いとなる地域も多い。おそらく、水田稲作技術の定着直前と人口増加後の時期の居住域面積や住居址数を集計すれば、地域によっては数十倍という差に達することもあると思われる。もちろん、遺跡数や住居址数の比較はきわめて慎重に扱うべきものであり、ましてや人口を推測する際の難しさは承知しているつもりである。しかしながら、ここまで大きな違いとなって現れる、東日本南部以西の集落遺跡の増加と規模の拡大という現象に対し、急速な人口増加以外の解釈を与えることは、もはや現実的ではない。

さて次に、水田稲作技術の定着期から人口増加期の食糧生産のあり方について考えてみたい。まず、各地の稲作技術定着初期の植物種子に関しては、今のところ調査例が非常に限られている。そのなかで、未だ不明な点が多いと言わざるを得ないものの、近年、滋賀県竜ヶ崎 A 遺跡出土の長原式土器に付着したキビや [滋賀県教育委員会 2006 : 175 頁], 神奈川県中屋敷遺跡で出土した前期末葉の 1000 粒を超えるアワなど [昭和女子大学歴史文化学科中屋敷遺跡調査団 2005], コメとともにアワ・キビ等の雑穀類がまとまって検出される例が目立ってきている点には、注目しておきたいと思う。特に関東地方一帯では、その後、中期前葉～中葉まで基本的な遺跡分布、石器組成等に変化が認められないことから、比較的長く同様の状態が続いていた可能性が高い。

一方、人口増加期では、遺構覆土の水洗選別による検出例をはじめ、遺構内から炭化種子類が多量にまとまって出土した事例が相当数蓄積されてきており、そうした例では、いずれの地域でも、穀類のなかでコメが圧倒的多数を占めることが明らかになっている [後藤 2004 : 126 頁]。コメの検出例には、下稗田遺跡 I-A 区 12 号貯蔵穴 (厚 40cm, 城ノ越式期) [下稗田遺跡調査指導委員会 1985 : 33 頁] を筆頭に、1 遺構で 1000 粒を超えるコメがまとまって出土する事例が、各地で散見されるようになるが、逆にコメ以外の穀類となると、まとまって出土した事例が目立たなくなる。確かに、水洗選別による調査事例には、東日本南部を中心に、コメ以外の穀類が優勢となる例が幾つかみられるようである。しかし、これらも、床面直上や炉焼土内など、住居址との関係が明確な事例に絞

ると、コメの圧倒的優位は動かないものとなる [安藤 2002: 12・13 頁]。

つまり、遺跡数の急増期以降は、東日本南部以西の多くの地域において、水田稲作が農耕生産の中心になっていたことが想定できるのであり、逆に乾燥耕地によるアワ・キビ等の雑穀生産は、きわめて限られていたと考えられることになる。だとすれば、狩猟・漁撈・採集活動による食糧生産の増産がそれほど期待できない以上、弥生時代中期までの人口の急増を支えていたのは、水田稲作によるcarrying capacity（人口支持力）の増加であったと考えざるを得なくなろう。つまり、水田稲作技術定着後の人口増加は、生業システムにおける水田稲作の中心化と表裏一体となって進行していたことになるわけである。

2) 水（水田）によって自然の超克を志向する世界観の形成

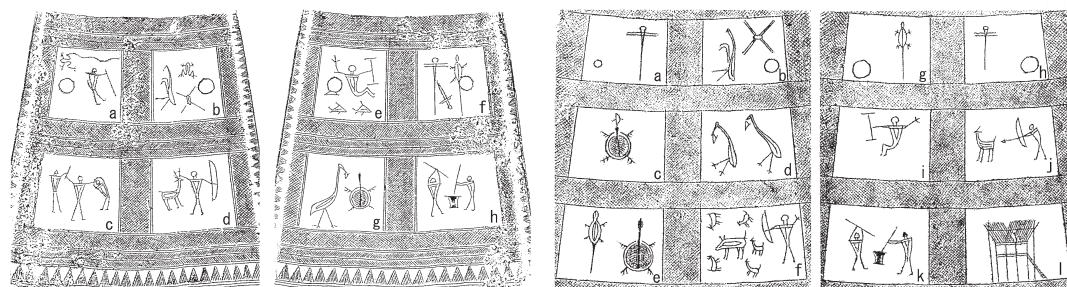
a. 銅鐸「絵画」から読み取る世界観

ところで、筆者は以前、弥生時代の銅鐸や土器の「絵画」の分析を行い、そこから当時の世界観の一端を読み取り得ることを指摘した [安藤 2006 a]。

菱環鈕式～扁平鈕式の銅鐸、そして東日本南部～中国・四国地方の中期後半の土器には、シカ・人物・建物等を中心とする共通の画題からなる「絵画」の描かれたものが数多く存在する。これらは、複数の画題や場面で構成されることや、時期・地域を越えた共通性をもつことから、これまでも何らかの神話的な物語を背景にもつと考えられてきたものである [小林 1959: 51-53 頁]。

そこで、これらの「絵画」の意味を探るために、複数の画題からなりかつ全体がわかる資料を対象に、その構造を分析してみたところ、これら「絵画」の画題同士の組み合わせ方方には、かなり厳格な約束事があることが判ってきた。モチーフ同士の関係が最もよく見える銅鐸の分析結果について、その後明らかになったことを含めてまとめておくと、まず、シカ・イノシシが、ミズドリ・カメ・トンボなどの水あるいは水田と関係する生物と組み合わせることはない。また、シカ・イノシシが、弓を持った人間（男）に射掛けられていたり、手で押さえられていたり、人間（男）に打ち負かされる存在として描かれているのに対し、サカナを除く上記の水・水田と関係する生物群は人間と組み合わせらない。つまり、人間以外の生物界（自然）には、水と地や山との対立があり、人間（男）は地や山の生物であるシカ・イノシシと対立し、それらを打ち負かす存在として描かれていることになる。シカ・イノシシと人間（男）が対立する場面は、銅鐸「絵画」のみならず、土器「絵画」においても最も多く描かれるものであり、この場面の意味するものが、これらの「絵画」の中心主題であったと考えることができる。

一方、人間の世界の表現としては、先述のシカ・イノシシとの対立以外に、高床式建物（倉庫）や脱穀、工字状の道具をもった水辺の行為、人間同士（男女）の対立などがみられる。このうち人間同士の対立を除いた画題は、水・水田に関わるものと考えてよく、人間の世界が水・水田と深く関係することが読み取れる。残った人間同士の対立は、男女の描き分けのある所謂連作四銅鐸 [佐原 1982: 250 頁] の桜ヶ丘 5 号銅鐸において、男性が武器をもって女性を打ち負かす場面になっており、男性が女性に対して優位に立つ関係を表現したのと考えられる。となると、男性が武器を持って対立し、かつ打ち負かす相手として描かれている女性とシカは、男性との関係において同じ位置に置かれていることになる。



第1図 桜ヶ丘5号銅鐸(左)と伝香川県銅鐸(右)の「絵画」
(国立歴史民俗博物館編1997より改変)

連作四銅鐸では、人間のみが描かれた場面として、工字状の道具を持った男性の姿と、脱穀をする女性の姿が描かれている。ともに水田に関わるものと解釈できるが、男性の工字状の道具を持った行為がサカナのいる水（水田）と強い関係性を示す一方で、女性の行為としては地上で行われる脱穀が選択されているところも偶然とは言えないだろう。連作四銅鐸では、シカ・イノシシを打ち負かす男性の画題とともに、この工字状の道具を持った行為が全ての銅鐸に描かれており、シカ・イノシシと激しく対立し優位に立つ存在である男性と水（水田）との結び付きが強調されていることになる（第1図）。

以上をまとめると、銅鐸「絵画」は、「水と地」「人間と自然」「男性と女性」という3つの対立軸によって構成されており、いずれの対立においても前者が優位に立つという関係が表現されていると理解できる。こうした関係性の複合のなかで、最も優位な位置に立つものとして描かれているのは、人間の世界において水と強く結び付く男性である。逆に男性から最も遠い位置にいるのは、自然の中で地と関係する女性であるメスジカということになる。銅鐸「絵画」において、シカは角を表現しないことがひとつの約束事になっており、かつ角のないシカを打ち負かす人間（男）の画題が最も多く描かれているのは、人間の世界で最も自然から遠い位置にある、いわば人間のなかの人間としての男性と、自然のなかで最も人間から遠い位置にある、いわば自然のなかの自然であるメスジカを対置し、前者が後者に打ち勝つことを強調するという意味があったと考えていいだろう。これまで十分な説明ができなかった角のないシカの謎は、「絵画」の構造を捉えることで、論理的な説明が可能となるのである。

つまり、銅鐸「絵画」は、水（水田）と深い関係をもつ人間が、地をはじめとする自然に打ち勝つことを表現していることになり、そこに水（水田）によって自然あるいはその一部を超克することで人間の世界が形成されるという意識の芽生えを想定することが可能になってくる。このような自然の超克を志向する意識に基づく世界観は、人間が世界あるいはその一部を能動的に変えられるという意識にも結び付いていたと予想され、そこに冷たい社会から熱い社会[シャルボニエ1970:31頁]への移行の始まり、あるいは永劫回帰の時間観念に対する直線的な時間観念[エリアーデ1963]の萌芽をみることも可能になろう。かねてより、民族学や文献史学の成果からの演繹によって、農耕社会において直線的な時間意識が成立していたことを想定する意見はみられたが[安永1959:5-6頁など]、それを具体的な「テキスト」から読み取り得たことの意義は大きいと考えている。

なお、土器の「絵画」も、角の描かれたシカが多いなどの幾つかの相違点は認められるものの、その構造を分析した結果、基本的に銅鐸の「絵画」と同一の構造をもつと考えることができた[安藤2006a:56-62頁]。角のあるシカが目立つのは、銅鐸というきわめて希少で特殊な祭祀具を作る限られた数の製作集団と、土器を製作する普通の人々の間の、「絵画」やその背景にある意味の世

界（物語？）の約束事に対する理解の差，そして継承力の差からくる「ブレ」として理解すべきである [安藤 2006 b : 96・97 頁]。となると，シカを中心的な画題とする「絵画」は，基本的に同じ意味の世界を背景にもつことになり，こうした「絵画」が分布する時空間的範囲には，水（水田）によって自然の超克を志向する，同様の世界観が広がっていた可能性が高くなるわけである。

b. 縄文文化の世界観

さて，以上に述べてきた「絵画」の時空間的分布について論じる前に，ここで弥生文化における水（水田）によって自然の超克を志向する世界観がどのような過程で形成されたのか，という点についてまとめておきたいと思う。この問題に取り組むためには，弥生時代を取り巻く時代・地域における世界観の比較と，東アジアにおける農耕技術の展開過程の究明が必要になってくる。前者の世界観の比較においては，まずは弥生文化の母体である縄文文化と，弥生文化の成立に強い影響を与えた朝鮮半島無文土器文化の世界観の検討が不可欠である。この点については，別稿をすでに提出しているため，以下，縄文文化と朝鮮半島無文土器文化に分けて，その概要を述べることにしたい。

縄文時代は，弥生時代以上に具象的表現の多い時代である。そのため，まずは両者の関係を整理しておかなければならないだろう。しかし，結論から言うと，縄文時代の具象的表現には，弥生時代「絵画」との直接的な関係を読み取ることはできないと考えている。これまでも指摘されてきたように，縄文時代の具象的表現は基本的に立体表現である [春成 1997 : 55・56 頁]。また，土偶や動物形土製品をはじめとする具象的表現の多くは，単独で存在することが基本になっている。もちろん，東北地方後期の狩猟文土器や中部地方中期の意匠文土器などに，ある約束事に基づいた具象的表現間の関係をみることはできるものの，これらもその具象的表現自体は，土器の器形・装飾を含めた形態全体の中に不可分に溶け込んでいるのであり，ひとつの土器全体があるイメージの客観化の過程で生み出されたものとみるのが妥当なように思える。とすれば，これも個々の土偶や土製品と同様，単独でひとつの「モノ」を表現しているとみなすことができよう。この点は，器物そのものの形態からは独立して描かれる，弥生時代「絵画」との大きな違いである。

こうした単独で完結した立体表現は，それ自体が，ある「モノ」のイメージであったことを強く示唆するものと考えられる。つまり，木村重信氏の言う「オブジェ」，すなわち「呪術的な作用が，それより発し，そこに働いているという意味での事物，物体」的なものということである [木村 1999 : 20 頁]。土偶や動物形土製品はそれ自体でひとつの「モノ」なのであり，それと現実の「モノ」が呪術的作用に基づいて同一視されていたと見なすことができよう。その多くが立体表現であるのも，この点が深く絡んでいるとみたい。なお，土偶や各種土製品は，各種遺構・遺物とのコンテクスチュアルな関係が捉えにくく，それ故に意味・機能の議論を難しくしているようであるが，それも，それらがそれ自体でひとつの「モノ」であるところの「オブジェ」的な造形であることと関係するのだろう。つまり，縄文時代の具象的表現は，ある現象世界の説明である「コト」を複数のモチーフの組み合わせで表現した弥生時代の「絵画」とは，根本的に異なる次元にあるものと理解すべきなのである。

しかし，このことは，縄文文化の具象的表現と銅鐸「絵画」のモチーフや構造を直接的に比較す

ることができない点を示しているだけであって、そこから縄文文化の世界観の一端を読み取り得る可能性や、縄文文化と弥生文化の世界観の関係自体を否定するものではない。例えば、中部高地の複数の具象的表現が組み合わさる土器の構造を分析し、そこから人間界と動物界のコントラストとシンメトリ的関係を読み取った小杉康氏の研究などは〔小杉2007：233-255頁〕、非常に示唆に富むものである。今後も、縄文文化の世界観にアプローチするための資料・方法を模索していくことにより、いずれ弥生時代「絵画」の世界観との対比も可能になってくると思われる。

一方、縄文時代の世界観の検討に際しては、アイヌを含む東北アジアの森林・海岸環境に適応した狩猟・採集・漁撈民の世界観も参考になろう。例えば山田孝子氏は、アイヌ語の語彙の分析を通じ、アイヌの現象世界の認識の仕方とその深層にある構造の究明を試みている〔山田1994〕。氏によれば、アイヌの世界（宇宙）は、人間の世界であるアイヌ・モシリと神の世界であるカムイ・モシリで構成され、アイヌ・モシリの諸現象は、空と地下、海と山、男と女、人間と自然といった対立軸によって説明されるという。

対立軸に弥生時代「絵画」と共通するものが多くなっているが、これらの対立軸自体は、類似した自然環境下であれば広く認められるものと考えられ、その共通性を特段強調する必要はない。注目したいのは、相違点のほうである。アイヌの世界観は、自然を含め全てのものの本質的平等性を根本としており、世界の安定は相互補完性、一般的互酬性で支えられているという。これはニブヒ等の東北アジアの狩猟・採集民の世界観とも共通している。

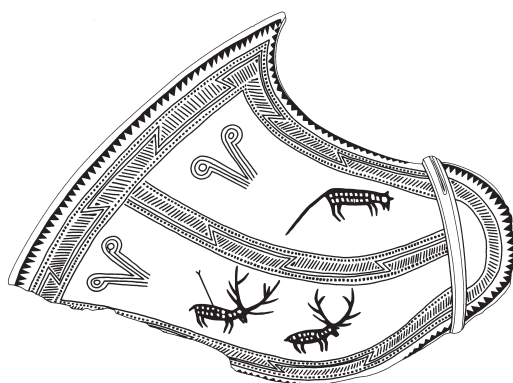
これに対し、「絵画」から読み取ることのできた弥生時代の世界観は、対立するもの同士の優劣の差を表現したものである。山田氏は、『記・紀』にみられる上代日本の世界観に構成員の上下関係が認められることを示し、アイヌの世界観との相違点を「弥生時代以降の農耕を基盤として発展した社会・政治的体制による」ものと理解している。時間的に大きな隔たりがあるとはいえ、縄文文化とアイヌ文化に系統的な連続性があるとすれば、アイヌと同じく狩猟・採集・漁撈に経済的基盤を置く縄文文化において、同様の一般的互酬性を基本とする世界観の存在を想定することは、決して不可能ではないはずである。また、それは先述の小杉氏の分析結果とも矛盾しないと考えられる。

とすれば、弥生時代「絵画」にみられる不平等的な世界観は、弥生文化において形成され定着したものと考えられることになる。

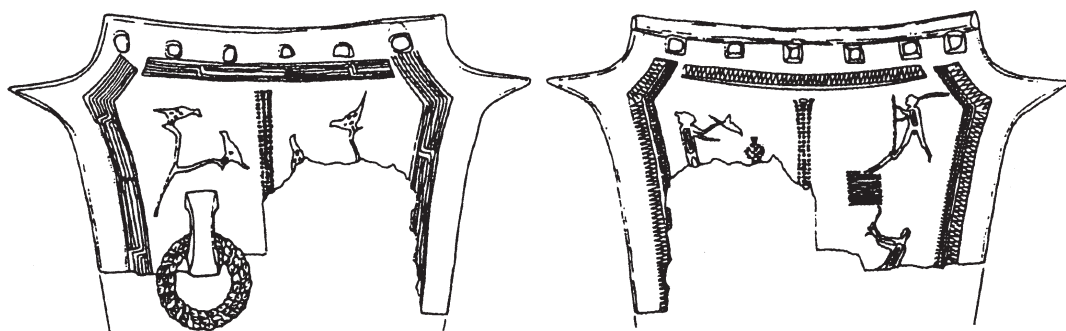
c. 朝鮮半島無文土器文化の世界観

そこで問題となってくるのが、朝鮮半島無文土器文化の世界観である。今のところ手がかりになるのは、少数の青銅器に描かれた「絵画」と、時期の特定できない岩画のみであるが、これらはいずれも線画であり、描かれる器物の器形・装飾から独立したものとして描かれている点で、弥生文化の「絵画」と同様、現象世界の「コト」を表現したものである可能性が高い。もし両者に関係があるとすれば、それぞれのモチーフや構造の対比も可能になってこよう。そこでここでは、これらの「絵画」と、弥生時代「絵画」との比較を行い、両者の共通点・相違点を探ってみたいと思う。

無文土器文化の青銅器の「絵画」としては、東西里遺跡出土剣把形銅器2点、伝慶州出土肩甲形銅器（第2図）、伝大田市出土防牌形銅器（第3図）に描かれた例が知られている〔国立中央博物館・国立光州博物館1992：91・96-99頁〕。東西里遺跡例は、1点に角のないシカ、1点に手のひらが単



第2図 伝慶州出土肩甲形銅器(國立中央博物館・國立光州博物館 1992 より改変)



第3図 伝大田出土防牌形銅器(尹 1991 より改変)



第4図 盤亀台岩画(部分, 黄・文 1984 より改変)

独で描かれたものである。伝慶州出土例には、上下二分割された上の区画にトラが、下の区画に立派な角のある2頭のシカが配置される。シカのうちの1頭は矢負いである。最後の伝大田市出土例には、表にY字形の棒の上にとまる鳥が、裏には右に畠を耕す人物2人、左に人物1人が描かれる。畠を耕す人物の1人は男根の表現から男であることが判る。

このうち、角のないシカが存在する点、そして矢負いのシカが描かれる点は、弥生時代「絵画」と共通しており、両者の関係を強く示唆するものと考えられる。時期は不明であるものの、無文土器時代の可能性がある盤亀台の岩画（第4図）[黄・文1984]にも、角のないシカが多数描かれており、朝鮮半島無文土器文化の「絵画」の世界においても、メスジカが重要な存在だったことをうかがうことができる。

一方、畠を耕す人物が男性であることは、世界の形成・維持における男性の役割の重要性を想起させるものである。また、盤亀台の岩画に描かれた狩猟をする人物にも男根と考えられる表現がある。そこに弥生時代「絵画」と同じく、シカを大地の象徴とする観念や男女の対立を重ね合わせることができれば、これらの「絵画」の背景に、畠作（あるいは農耕）によって大地を超克することで人間の世界を形成するという意識を含んだ世界観の存在を、想定することが可能になってくる。

無文土器文化の具象的表現では、水と地の対立と優劣関係を示すものが今のところ見当たらない。盤亀台では、クジラ等の海獣とシカを中心とした陸獣がそれぞれまとまって描かれており、海と陸の対立関係があったことは想定できる。しかし、海獣も陸獣も狩猟の対象として描かれている箇所があり、その扱いはあくまでも対等である。その一方で、伝慶州出土例には、上の区画にトラが1頭、下の区画に矢負いを含むシカ2頭が描かれている。陸地の生態系の頂点であるトラがシカよりも上の位置に描かれている点は象徴的であり、自然界における、水と地とは別の対立軸と優劣関係の存在を示すものと考えられる。

以上のように、朝鮮半島無文土器文化の世界には、弥生文化の世界観と同様、いくつかの対立軸が存在し、かつそれらに優劣関係があったようである。また、その対立関係の複合のなかで、男性が優位に立っていた可能性が高い点も注目されよう。もし、こうした理解が正しければ、弥生文化成立期における朝鮮半島無文土器文化の影響の大きさからみても、上記のような不平等性を内包する世界観が、弥生文化の世界観の形成に関与していた可能性が浮かび上がってくることになる。一方で、朝鮮半島無文土器文化では、畠作が人間の世界と関係し、水の優位性が描かれていない点で、弥生文化の「絵画」とは大きく異なる。とすれば、人間の世界と水田稲作との結び付きを強調する点は、日本列島のなかで形成されたことになるはずである。

3) 自然環境・生業・人口・世界観の関係

a. 日本列島の自然環境の特徴と水田稲作技術・畠作技術との関係

先述のように、日本列島では、北部九州における刻目突帯文期が、その後の水田稲作技術展開の画期となり、以後、数百年のうちに東日本南部以西の広い範囲において、水田稲作を中心とする生業システムの形成と、急激な人口増加が生じていた。この生業システムにおける水田稲作の中心化が、弥生文化の世界観にみられる人間の世界と水田稲作との密接な結び付きと関係していることは、まず間違いのないところであろう。では、何故、弥生文化において、水田稲作中心の生業システム

が形成されたのか。この点は、東アジアにおける農耕技術の展開過程と、日本列島の自然環境との関係から理解することが可能になってくる [安藤 2007]。

そこでまず、日本列島の自然環境と農耕技術の関係をまとめておくことにしよう。温暖湿潤気候の本州島、四国島、九州島は、年平均気温摂氏 15 度前後、年間降水量 1500mm 前後となる地域が多い。日本海側では冬季の降雪量が突出するものの、全体的に梅雨～夏季に降水量が多くなっている。また、夏季には太平洋高気圧の勢力が強くなるため、降水量のわりに日照時間が長いという特徴もある。地域的な差異はあるものの、基本的に東日本北部に対して、東日本南部以西において、気温・降水量ともに高くなる傾向がみられる。

また、プレート境界の活発な造山運動・火山活動で形成された日本列島は、北東—南西方向に細長く伸びた起伏に富んだ地形を特徴とする。降水量が多いこともあり、山地・山脈は無数の谷によって開析され、河川の下流域に扇状地性・三角州性の平野を形成するが、大陸部に比べて河川は短く急勾配で、平野も面積が狭く緩やかな傾斜をもつ場所が多くなっている。また、各地に河川、海的作用によって形成された台地も発達している。

こうした日本列島の自然環境の特徴は、農耕技術の展開と深く関係していたものと考えられることができる。例えば、日本列島は、降水量の関係で土壌 pH 5 前後の強い酸性を示す土地が多くなっているが、酸性が強くなると土壌は貧栄養化し、乾燥耕地での作物の生産に不向きになる。また、火山灰起源の土壌母材が広くみられることも、酸性状態だとアルミニウムイオンがリン酸と強力に結びついてしまうため、貧栄養性に拍車をかけることになる。つまり、日本列島は基本的に乾燥耕地の展開には向かない地域なのであり、そのなかで安定した畠作を行うためには、多量のリン酸を供給する施肥技術と深耕の技術が不可欠になるのである。

一方、日本列島の自然環境は、水田稲作の展開に対しては有利に働いたと考えてよさそうである。東日本南部以西の春～秋の気温、降水量とそのパターン、夏季の日照量は、温暖な気候を好み、出穂期に最も水分を必要とし、結実期にかけて日照を必要とする稲の栽培に適した条件と考えられる。水田では、水の緩衝作用によって土壌 pH が中性付近に落ち着き、また、土壌内が還元状態になることから、土壌養分の有効化が促進される。水田では、連作障害を引き起こす土壌生物の繁殖も抑えられるため、日本列島のような酸性土壌地域でも、継続的なコメの生産が可能になるのである。

さらに、日本列島の起伏に富んだ地形は、弥生時代における自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田の展開に、非常に有利に働いたようである。山地・丘陵・台地を複雑に開析した大小さまざまな谷地形と、それに伴う扇状地・扇状地性の平野の発達は、日本列島の至るところに、無数の湧水点や湧水帯、それらを水源とする小河川を形成した。また、三角州を除いた平野には、大陸とは異なり、水の得やすい場所に、視認の可能な数%～1% 前後の微傾斜が多数存在している。日本列島においては、そうした水源と自然の微傾斜を利用することで、容易に灌漑型の水田稲作を営むことができるのである。

弥生時代の水田稲作技術は、畜力の不使用、施肥技術の未発達、耕起具の貧弱さという特徴もあり、コメの生産に関わる物質収支や労働の多くが耕地内で完結する、比較的簡便な技術と理解できるものである。上記のような日本列島の自然環境は、まさにこうした簡便な技術による水田稲作の展開に適していたことになる。それが東日本南部以西の弥生文化において、水田稲作中心の生業シ

システムが形成される、大きな要因になっていたことは間違いない。

b. 東アジアにおける農耕技術の展開過程からみた弥生時代の農耕技術

さて、この水田稲作中心の生業システムの形成の過程を、東アジアにおける農耕技術の展開過程と絡めてまとめると以下のようなだろう。

弥生時代の水田稲作技術の伝播ルートをめぐることは、現在も意見の一致をみていないが、私は物質文化上の連続性を重視する意見に従い [町田 1987 : 134-136 頁, 宮本 2003 a : 5-9 頁], 山東半島・遼東半島を含む渤海沿岸地域を経由した北方ルートで伝播した可能性が高いと考えている [安藤 2007 : 438 頁]。中国では、裴李崗文化期には淮河流域に、龍山文化期には山東半島にまで稲作技術が広がっていたことが明らかになっており [宮本 2003 b : 12 頁], これが渤海沿岸地域を経て朝鮮半島を南下したと考えるわけである。中国における稲作の北上に関しては、以前より華北における畠作の連作体系のなかに、イネが組み込まれたとする意見があるが [小柳 1999 : 81 頁, 宮本 2003 b : 106 頁], 華中地域よりも寒冷で降水量も少なくなる地域でイネを栽培するためには、その双方を緩和する作用のある水田のほうが適していることは間違いない [安藤 2007 : 434 頁]。時代は下がるものの、前漢代山西省の農書『汜勝之書』に記された水田は、まさに微傾斜利用の灌漑型小区画水田である。未だ証拠は不十分であるが、華北地域への水田稲作の北上が、その当初から、水を効率よく利用できる微傾斜利用の灌漑型水田技術とともに進んだ可能性を想定することも決して不可能ではないと考えている。

一方、中国新石器時代におけるアワ・キビ主体の乾燥耕地による農耕は、中国東北部から渭河流域にかけて展開した。磁山文化併行期には、ブタの飼養技術とセットになり、簡便な施肥と耕起を行う畠作技術が広範囲に広がっていたようである。しかし、乾燥耕地は土壌pHによって生産量が大きく左右されるため、新石器時代のアワ・キビ分布は、土壌pHと関係する降水量分布に制限され淮河以南の地域には広がらない。

朝鮮半島の新石器時代における農耕技術は、山東地域に定着していた、上記のような畠作技術と灌漑型水田稲作技術が朝鮮半島に伝わり、南下することで展開した。朝鮮半島では、仰韶文化併行期末頃には、華北系の畠作技術が南部にまで浸透していたことが明らかになっており、稲作はやや遅れた時期に伝播したと想定されている [宮本 2003 b : 8-11 頁]。その後、無文土器時代前・中期になると、畠作、水田稲作ともに生業に占める比重が大きくなるとともに、遺跡数や集落規模も急速に拡大する。しかし、朝鮮半島では南下するにつれ降水量が増加するため、畠作には不利、水田稲作には有利な条件が大きくなっていく。山東地域や朝鮮半島中部に比して、朝鮮半島南部で水田関連の遺跡・遺物が目立ってくるのは、そうした気候・土壌の条件が関係するものと考えていいだろう。

しかし、朝鮮半島では扇状地性の平野が少ないため、沖積地の傾斜がきわめて小さくなっている。朝鮮半島の灌漑型小区画水田が、丘陵縁辺や谷のなかの微傾斜に営まれているのは、そうした地形的条件が関係するものとみていいだろう。つまり、日本列島に比べると、その拡大に対する地形的な制約が大きかったことになり、それが南部地域であっても畠作が目立つ理由と考えられる。畠は、いずれも酸性土壌地域のなかでは比較的土壌の条件がいい河川沿いの微高地に営まれている。また、

大坪里遺跡のように自然堤防上に集落と畠が細長く並列する例では〔慶尚大学校博物館 1999〕、居住域のさまざまな廃棄物を耕地に還元するシステムを想定することも可能である。畠作を強調した無文土器文化の世界観は、こうした農耕のあり方のなかで形成されたものなのである。

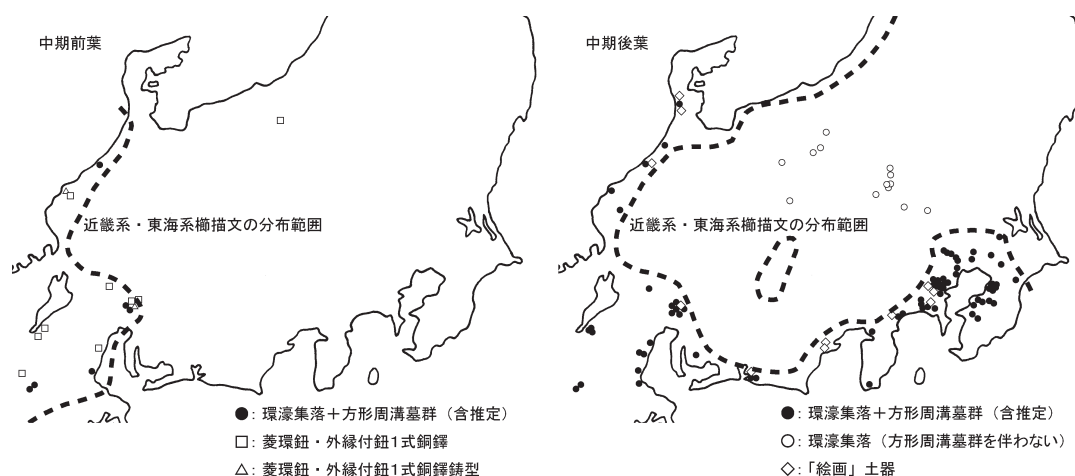
先述のように、日本列島各地の弥生文化の形成期には、コメとともにアワ・キビを中心とする雑穀類が出土する例が認められる。ヒエ及びダイズ等の豆類については、縄文時代中期以前に日本列島内で栽培化された可能性が高くなってきたが〔吉崎 1995：21-24 頁、保坂・他 2008：32・33 頁〕、アワ・キビについては、華北地域にその淵源があると考えて間違いない。つまり、これらの畠作物の生産技術は、朝鮮半島を南下してきた華北系の畠作技術と理解できるのであり、日本列島にも、華北系畠作技術と自然微傾斜利用の灌漑型水田稲作技術がセットでもたらされていたことになる。

縄文時代晩期終末～弥生時代初頭には、多くの地域において小規模で比較的移動の容易な集落が営まれていたと考えられる。そうした状況下では、耕地を頻繁に移動することができるため、不利な土壌条件下でも生業の一部に畠作を取り込むことが可能になる。関東地方一帯の前期後葉～中期中葉の遺跡のあり方は、こうした状況が比較的長く続いたものと理解できる。一方、人口が増加し、農耕による生産物が食糧の中心になると、継続的な生産が困難な乾燥耕地は、きわめて非効率的になるはずである。こうしたなかで、気候的にも地形的にも自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田の展開に適した条件をもっていた東日本南部以西では、人口が急激な増加傾向を見せ始めるとともに、水田稲作が生業システムの中心になっていったのである。

c. 自然の超克を志向する世界観と人口増加・社会の複雑化の関係

自然の超克を志向する世界観の存在をしめす銅鐸「絵画」は、菱環鈕 2 式の井向 2 号銅鐸・十六町銅鐸にまで遡る。菱環鈕式の鋳型の出土例からみて、中期初頭～前葉のものと考えていいだろう〔春成 2007：146 頁〕。つまり、弥生時代中期前葉までには、菱環鈕銅鐸を製作し用いていた地域において、同様の世界観が広がっていた可能性が想定できることになる。また、同じ構造をもつとは断言できないものの、吉武高木遺跡出土の金海式甕棺に描かれた雌雄 2 頭のシカを含めてよければ、ほぼ同時期の北部九州にも同様の世界観が存在していたことになろう。もちろん、世界観自体は、「絵画」資料の出現以前に成立していた可能性も考えられるが、今のところそれを示す手掛かりを見出すことはできない。

この中期前葉までにおける「絵画」資料と菱環鈕式銅鐸の分布で注目されるのは、それが同時期の規模の大きな環濠集落の分布、あるいは急速な人口増加が認められる地域とほぼ重なることである。例えば、銅鐸については、仮に 1 段階新しい外縁付鈕 1 式の銅鐸を加えても、2007 年に出土した長野県柳沢遺跡の銅鐸 1 点を除いて、他は東海地方西部と越前地域北部を結ぶラインより西側で出土していることになる。このラインは、中期前葉における規模の大きな（環濠）集落と方形周溝墓群がセットになった集落形態の東限、つまり濃尾平野の朝日遺跡と加賀地域南部の八日市地方遺跡を結ぶラインに重なっている。また、以前筆者は、土器における櫛描文と「絵画」のあり方を分析し、近畿系・東海系の中期の櫛描文が、「絵画」の意味と何らかの関係をもつ可能性があることを示したが〔安藤 1999：129・130 頁〕、中期前葉までの櫛描文の分布も尾張地域から加賀地域を東限としており、やはり古式の銅鐸の分布にきわめて近いことがうかがわれる（第 5 図左）。



第5図 銅鐸・「絵画」・櫛描文・環濠集落の分布

その後、中期後葉になると、連作四銅鐸をはじめ、依然として銅鐸に「絵画」が描かれるほか、土器の「絵画」資料が急速に増加する。土器「絵画」は、銅鐸ほどの厳密さはないものの、同様の画題や構造をもつと考えられるものが数多く認められることから、やはり同様の世界観の拡がりを背景にもっていた可能性が高い。その分布は、東は銅鐸の分布範囲を大きく超えて南関東地方にまで及んでおり、それを中期後葉における集落遺跡のあり方と比較してみると、やはり規模の大きな（環濠）集落と方形周溝墓群がセットとなった集落形態の分布と重なることが判ってくる。また、それは、北陸の上越・中越地域を除き、近畿系・東海系の櫛描文の分布ともほぼ一致している（第5図右）。

このように見てくると、東日本南部以西では、能動的に自然に働きかけ、超克しようとする意識を含む世界観の拡がりがあり、規模の大きな（環濠）集落の成立・展開と深く関係していた可能性が高くなっていくものと思われる。というより、こうした世界を能動的に変化させることに連なる世界観と一体となることで、はじめて、人口の増加と絡んだ、規模の大きな集落群の形成、そして後述する社会的関係の変化が可能になったと言ってもいいだろう。

以上をまとめれば、弥生時代における東日本南部以西では、日本列島の自然環境と、東アジアにおける農耕技術の展開を含めた歴史的環境という二つの軸のなかで、水田稲作中心の生業システムの成立、人口の急激な増加、規模の大きな（環濠）集落・集落群の展開、そして水（水田）によって自然の超克を志向する、不平等原理あるいは直線的な時間意識に基く世界観の形成が、相互に絡み合いながら展開していたことになる。それは、どれかひとつが原因となり他が結果となるような因果関係で説明できるものではない。自然と歴史に条件付けられた物質的生産とそれを支える社会的関係、観念的世界の総体的連関を弁証法的に捉えることによってのみ理解できるものと考えられよう。

そこで次章では、社会的関係を中心とした、東日本南部以西における弥生文化の諸様相についての考察へと進んでいくことにしたい。

③……………弥生時代の集落群にみられる平等志向と中心形成志向

1) 東日本南部以西における地域社会の形成とその時空間的動態

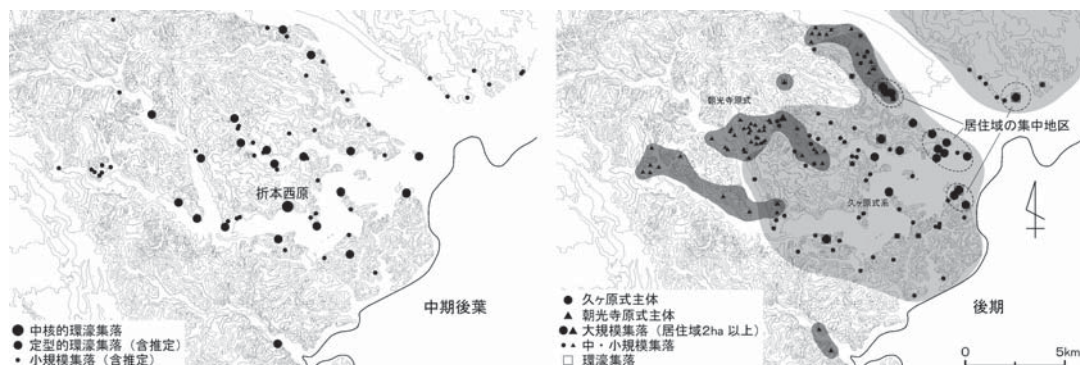
a. 南関東地方の弥生時代中期後葉と後期の集落群にみられる二つのパターン

東日本南部以西では、水田稲作中心の生業システムが確立し人口が急増するとともに、複数の集落の地域的まとまり（これを「地域社会」と呼んでおく）が形成されるようになる。こうした地域社会は、その規模はさまざまであっても、東日本南部以西には普遍的に存在していたと考えているが、その具体的な様相を把握するためには、高い密度で発掘調査が行われている地域を分析対象とする必要がある。そこでまず、地域社会の様相の捉えやすい南関東地方の事例を取り上げ、地域社会の構造とその時間的変化の具体相をまとめたうえで、他地域との比較を行うことにする。

南関東地方では、中期後葉の宮ノ台式期に、そうした複数の集落からなる地域社会の存在が明確になる。宮ノ台式期における集落の地域的まとまりには、環濠集落からなる集落群と、環濠を持たない集落からなる集落群が認められるが、そうした違いは、主に環濠集落の形成に適した地形の有無と関係することが明らかになっている [安藤 2003 : 88 頁]。

環濠集落からなる集落群の具体的な様相がよくわかる、東京湾西岸の鶴見川流域では、直径 15 km ほどの範囲に、約 20 箇所の環濠集落が群在している（第 6 図左）。環濠集落のほとんどは、2 万 m² 前後の居住域をもち、居住域の外側に一ヶ所～数ヶ所の方形周溝墓群を形成する、きわめて定型的な集落である。鶴見川流域においては、こうした定型的な環濠集落が過不足なく収まる、3 万 m² 前後の平坦面をもつ独立丘陵状の台地を狙い打つように環濠集落が形成されており [安藤・津村 2006 : 284 頁]、そこに、集落形成時における同じ規模・構造の集落を志向する規制のようなものを読み取ることが可能になってくる。なお、環濠集落の周囲には、中期後葉の後葉を中心に、環濠をもたない小規模な集落が多数形成されるが、環濠集落群の継続期間においては、人口の大半が環濠集落に居住していたと考えていい。

そうした定型的な環濠集落のまとまりの中であって、鶴見川流域では、1 ヶ所、他を圧倒する規模の居住域をもつ集落（折本西原遺跡）があり、そこには通常の環濠集落のものから隔絶した規模



第 6 図 鶴見川流域の中期後葉・後期の集落遺跡群

をもつ方形周溝墓が集落内に単独で築かれるという特徴もみられる。また、流域で最大級の堅穴住居址も検出されており、この集落が、環濠集落群をまとめる中心的な役割を果たす集落であったことが想定できる。ただし、同様の規模の方形周溝墓は、集落内部ではないものの、周辺の集落にも認められ、大型の住居も決してこの集落のみが独占的に築いていたわけではない。集落内の大型方形周溝墓が断続的に形成されているように、こうした集落または大型方形周溝墓に葬られた人物の中心性は恒常的なものではなく、断続的あるいは一時的に顕在化し、時には他の集落、人物へとその役割が移動するような、不安定なものであったと理解しておくべきであろう。

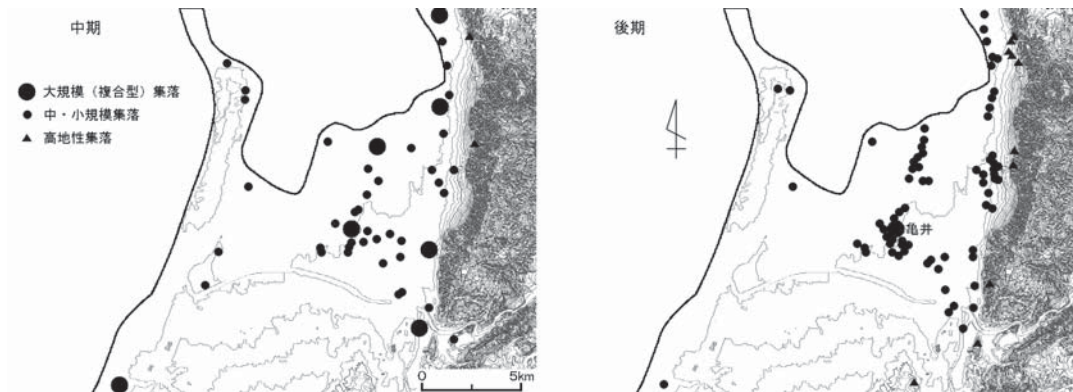
こうした集落群の特徴は、多少の差異を含みながら、他の環濠集落群でも認めることができる。また、環濠をもたない集落からなる集落群にも、集落内大型方形周溝墓や大型住居が存在する例があり、これらは地形的な制約等により環濠集落を形成しないことを除けば、基本的に環濠集落群と同じ構造を有しているものと考えられる〔安藤 2003：86-88 頁〕。

さて、鶴見川流域における、こうした中期後葉の環濠集落のまとまりは、後期初頭を迎えると突如として解体され、後期中葉にかけて全く異なった構成の集落群へと再編される〔安藤 2003：84 頁〕。具体的には、環濠集落の大半が後期に継続せずに廃絶され、集落分布の中心が多摩川下流域・鶴見川下流域に移動する（第6図右）。中期後葉の環濠集落が、眼前の沖積地の広狭に関わらず規模・内容ともに定型的であるのに対して、後期特に中葉以降の集落は、広い沖積地を臨む広い平坦面をもつ台地上において居住域が大規模化し、沖積地の狭い場所では小規模な集落が群在するようになるなど、地形の条件に応じた集落形態をとる〔安藤・津村 2006：278 頁〕。大規模な集落が形成される範囲には、複数の居住域が密集した、特に人口の集中する場所が数ヶ所存在しており、そうした場所に地域社会をまとめる中心が存在していた可能性が考えられる〔安藤 2008：84・85 頁〕。なお、後期には、環濠をもつ集落の比率も減少し、環濠は集落の規模や継続期間と全く関係なく一部の集落に掘削されるのみとなる。また、中期後葉の集落にみられた、方形周溝墓群がみられなくなり、墓域が存在しないか、あるいは1～数基のみの方形周溝墓をもつ集落が増加する。このことは、方形周溝墓の被葬者が、集落の人口のごく一部になっていたことを物語ると考えていいだろう。

以上のように、南関東地方の中期後葉と後期における地域社会を形成する集落群には、二つの異なったパターンが認められるようである。中期後葉の集落群は、一ヶ所の中心的集落をもちながらも、それ以外は基本的に平等的な集落によって形成されている。環濠集落の立地に強い選択性が認められることから、これらは、等質的・等規模的な環濠集落を意識的に形成していると考えていい。ここでは、こうした等質的・等規模的な集落を形成しようとする動きに注目し、これを「平等志向」と呼んでおくことにする。一方、後期の集落群では、個々の集落が平等性を志向することなく、地形の条件に応じてフレキシブルにその規模を変化させている。そこでは、集落群のなかに特に人口の集中する中心的な場所が形成されるが、ここではその点に注目し、集落規模に不均衡が現れるとともに中心が形成される動きを「中心形成志向」と呼んでおくことにしたい。

b. 大和・河内地域、北部九州地域の弥生時代前期～後期の集落群構成

南関東地方にみられた二つの集落群パターンの形成の背景を解釈するためには、東日本南部以西の諸地域との比較が不可欠になってくる。しかし、発掘調査密度がきわめて高く、かつ集落全体の



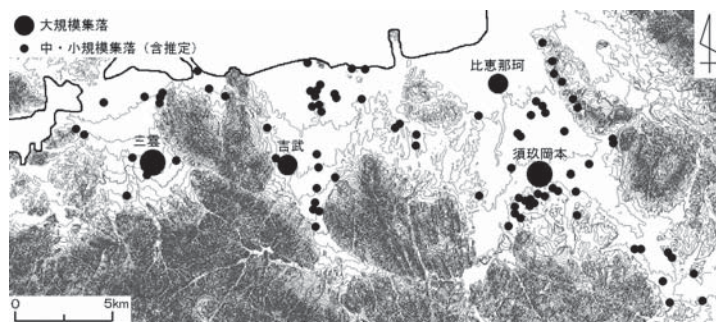
第7図 河内平野の中期・後期の集落遺跡群
(三好 1999・若林 2007 より作成)

発掘例も多い南関東地方以外となると、個々の集落遺跡の内容や集落の地域的なまとまりの様相を議論するための具体的・客観的な情報は必ずしも多くない。必然的に比較のできる地域は限定されることになるが、そうしたなか、大和盆地・河内平野（以下大和・河内地域とする）、北部九州地域（特に玄界灘沿岸地域）をはじめとする、長きにわたる研究の蓄積がありかつ現在も盛んな議論が展開されている地域は、個々の研究成果を取り上げていくことで、南関東地方の事例との対比がある程度可能になってくる。

大和・河内地域では、先述のように、水田稲作技術の定着後、人口が増加し始め、中期にかけて増加率が高くなっていたことがうかがわれる。その結果、大和盆地、河内平野ともに、大小さまざまな集落が高い密度で分布するようになり〔若林 2007：155 頁〕、そのうち、特に大規模化したものが、いわゆる「拠点集落」と呼ばれるものになっていく。個々の集落遺跡の具体的な内容は、必ずしも明らかになっているわけではないが、両地域ともに、こうした「拠点集落」が、平野内、盆地内に複数、面的に分布すると考えられることが多くなっている（第7図左）。

しかし、「拠点集落」については、これらを「都市」と評価する見解〔広瀬 1998：51-53 頁〕から、周囲の小規模な集落と同等の居住単位が複数集合したもの（複合型集落）とみる見解〔若林 2001a：44 頁、寺前 2006：117・118 頁〕までさまざまであり、「拠点集落」間の関係についても、相互の関係が等質的・平等的であったとみなす立場〔酒井 1984：49 頁〕から、集落間に階層的関係を想定する立場〔藤田 1999：145・146 頁〕まで、大きな幅がある。個々の意見の是非をここで検討する余裕はないが、現在は、断片的な調査地点情報の丹念な整理が進められ〔大和弥生文化の会 1995 など〕、併せて石器、木器等の遺物研究が蓄積されてきたことにより〔秋山 2007：598-620・672-675 頁、若林 2001b・2006b：77・78 頁、寺前 2006〕、集落遺跡の遺構や遺物のあり方に質的な違いが認められないこと、つまり、それらの均質性を強調する意見が強くなってきているようである。

仮にそうした理解が正しいとすれば、大和盆地、河内平野の集落群は、複数の等質的な大規模集落（あるいは複合型集落）からなる平等志向の集落群と評価することが可能になってくる。もちろん、大規模集落の周囲には、中規模・小規模の集落が多数点在しており、これらを地域社会の集落のまとまりとして捉えるのであれば、中心形成志向の集落群と見なせなくはない。しかし、大規模集落同士は、石器や木器等の生活必需品の原材料、未成品、製品の流通において密接なネットワークを形成しており〔酒井 1984：47・48 頁ほか〕、また、南関東地方の地域社会の範囲・規模と比較しても、河内平野、大和盆地という単位で、南関東地方と同様の地域社会が形成されていた可能性は



第8図 北部九州地域の中期前半の集落遺跡群
(小澤 2000 より作成)

充分に考えられる。つまり、大和・河内地域では、下位の集落群が中心形成志向となる可能性を残しつつも、大規模集落のまとまりで構成される地域社会は、平等志向と評価することが可能になるのである。

こうした中期の地域社会の構成は、後期になると大きな変化をみせるようである（第7図右）。中期の大規模集落の多くが中期末～後期初頭に解体し、河内平野の亀井遺跡、大和盆地の唐古・鍵遺跡などの少数の集落を残して小規模分散化してしまう〔地村 2001：100-102 頁〕。同時に、それまで大規模な集落が見られなかった丘陵地帯において、中期末～後期初頭を中心に、規模の大きな集落が形成される。この丘陵地帯における集落の展開には別の解釈が必要であるが、全体としてみれば、大和・河内地域の集落群は、人口の集中する少数の大規模集落と、多数のより小規模な集落からなる、中心形成志向の集落群として見なすことが可能になってくる。つまり、この地域の集落群は、中期に平等志向を示し後期に中心形成志向となる、南関東地方と同じ変遷を辿っていたことになるわけである。

次に、北部九州地域の様相を概観してみたい。この地域では、水田稲作の定着が早かったために弥生時代初頭から人口増加がみられ始め、それとともに、地理的に独立した平野ごとの集落のまとまりが形成されたようである。特徴的なのは、比較的早い時期に規模の大きな中心的集落が現れ始める点で、そうした集落の例である板付遺跡や吉武高木遺跡群では、前期末～中期初頭に青銅武器類を副葬した墳丘をもつ厚葬墓群も出現している。ただし、細かく見れば平等性を志向した集落群と評価できそうな地域もあるため、明確な中心を形成する地域と、平等志向の地域の両者が混在していた可能性もある。

中期前葉になると、人口が急激な増加を示すとともに、吉野ヶ里遺跡のような、地域の中心となる大規模集落の存在が明確になってくる〔武末 2002：36-38〕。また、中期後半には、福岡平野の比恵・那珂遺跡群、須玖・岡本遺跡群や糸島平野の三雲遺跡群といった、より巨大な中心的集落も形成されていたようである〔吉留 1999：61-80 頁、武末 2002：57-60 頁〕。以後、中期前半までは、複数の平野に青銅武器類を副葬した墳丘墓が認められ、青銅器の初期鋳型も佐賀平野に集中する傾向を見せつつも広い範囲に分散するなど〔片岡 1999：184 頁〕、地域ごとの優劣はそれほど明確でないが、中期後半になると、福岡平野と糸島平野の中心的集落が、その規模のみならず多量の前漢鏡を副葬した特定個人の墳丘墓を形成するなど、他地域の中心的集落に比して明らかな優位性を見せるようになる。中期後半には、青銅器の生産も、須玖・岡本遺跡群とその南部の筑紫野平野北端部の遺跡群に鋳型が集中するなど〔片岡 1999：151 頁〕、明らかな中心地を形成する。

北部九州地域は、特に玄界灘沿岸地域において、平野の地形的な独立性が高く、その面積も比較

的狭いという特徴がある。地域社会は、まずはそうした平野単位で形成された可能性が高く、そこでは早い時期から中心形成志向の集落群を形成していたようである。しかし、狭い平野単位の集落群同士の関係性に注目すると、中期前半までは平等志向的な関係がみられるようであり、中期後半以降になって、北部九州地域の複数の平野をまとめるような中心形成志向の動きが認められる。地域社会のレベルでは、早くから中心形成志向をみせる北部九州地域であるが、複数の地域社会の間では、南関東地方と大和・河内地域の地域社会にみられるような、平等志向から中心形成志向へと変化していることになる。

北部九州地域では、後期初頭に顕著な遺跡数の減少が認められるものの、中期以来の中心的集落は寧ろより大規模化し、中葉以降になると平野単位規模の地域社会の存在が再び明確になるようである [小澤 1999: 86-101 頁]。また、複数の地域社会のまとまりにおいても、青銅器生産をはじめとして福岡平野、糸島平野の中心性が継続していたと考えられる。ただ、そうした地域社会、地域社会間関係が継続する一方で、中期にみられた青銅鏡をはじめとする複数の副葬品をもつ厚墓葬の数が明らかに減少している点は興味深い [高木 2003: 228-235 頁]。評価は分かれるところであろうが、後期初頭の集落群の再編を機に、中心となる個人の顕在化を抑える力が発現するようになったと考えることもできる。実は、南関東地方や大和・河内地域においても、後期の中心形成志向の集落群の形成とともに、中期後葉より寧ろ中心となる個人の存在が不明瞭になっている。この点も、偶然の一致ではなく、その背景に何らかの共通したものがあると考えられるべきであろう。

c. 水田稲作と地域社会形成の関係

こうした南関東地方をはじめとする、地域社会の変化を理解するためには、まず地域社会形成の背景を整理しておかなければならない。そこに大きく絡むのは、やはり水田稲作と、石器、鉄器、木器などの生活必需品の製作・流通のあり方である。

弥生時代の水田経営の実態については、残念ながら未だ不明な点が多い。筆者は、現在までの水田址の調査事例をみる限り、その耕作主体はひとつの集落程度となる場合が多かったと想定しているが、もちろんそれで全てが説明できるわけではない。水田稲作への依存度が高まるにつれ、複数の集落による広大な水田の形成・耕作も当然行われていたものと思われる。東日本南部以西の例ではないが、宮城県富沢遺跡の中期中葉の広大な水田址などは、東北地方中部の集落がそれほど大きな人口を擁していたとは考えられないため、複数の集落の共同耕作の例と解釈することが可能である。

こうした水田の耕作とは別に、水田及び関連施設の敷設や維持にも、時にひとつの集落を超えた労働力が結集されることがあったものと考えられる。例えば、静岡県登呂遺跡の水田址 [杉原 1967: 3-5 頁] では、数千本に及ぶであろう矢板によって畦畔や水路が形成されている。これが、登呂遺跡の集落の労働力のみでなされていたとは考えにくいところである。堰や水路に関しても、千葉県常代遺跡では、中期後葉の幅 20 m に達する合掌型堰 3 ケ所と、そこから伸びる延べ 1 km 以上の水路が検出されており [君津市教育委員会 1996]、これらの施設の敷設・維持・管理にも大きな労働投下がなされていたはずである。今のところ、そうした労働力結集の実態について具体的に説明することは困難であるが、以上のような状況的な証拠からみて、東日本南部以西では、水田稲

作の依存度の高まりとともに、こうした大規模な労働投下の機会が増加し、それが不断に複数の集落同士の関係性を再生産する機能を果たしていたことは間違いないように思われる。

ただ、ここでひとつ注意をしておきたいのは、こうした複数の集落による労働力の結集において、単純に河川がその関係性の軸になるとの想定には再考が必要だということである。河川を軸にするという発想には、同一の中小河川を水源とすることによる複数の集落の利害関係の発生が想定されているものと思われる〔広瀬1997：130頁，寺沢2000：140-142頁など〕。しかし、弥生時代水田は、その場所の条件に応じた多様な水源を利用するという特徴があり、湧水利用にしても、堰による小河川利用にしても、ひとつの水源に対して、それで営み得る規模の水田が形成されるのが基本である。そうしたなかで、同一河川を水源として利用することが集落同士の関係を規定したり、あるいは集落の展開が同一河川に沿って行われたと考えなければならない理由はない。

議論が水田から離れるが、河川単位の集落群を想定する場合、河川を利用した交通・交流という側面を重視する意見もあるだろう。しかしこの点にも幾つかの注釈が必要である。そもそも、弥生時代の集落は、水田の形成しやすい微傾斜をもつ沖積地付近に立地することが多い。そうした場所では水流が速くなることが予想されるため、交通手段としての河川の利用は限定されるはずである。また、大和盆地や河内平野のような広大な沖積地をもつ地域の場合では、隣接する中小河川の流域との間に地理的な障害はなく、日常の交通・交流において河川にそれほど大きなメリットがあったとも思えない。ただし、台地や丘陵地域では、河川の流域は地形的に独立性の高い谷を形成し、逆に河川の間で台地や丘陵は起伏が大きく交通や視認関係の障害になることが多いため、そうした場所では複数の集落の地域的なまとまりが形成されやすいということはあるだろう。つまり、台地・丘陵地帯では、地形上の理由で河川流域単位の地域社会が形成されやすかったと考えられるわけであるが、それとて河川そのものが集落同士を結び付けていたことにはならないのである。

さて、水田稲作への依存度が高まるとともに複数の集落の関係性が深まる背景には、上記のような水田稲作に関わる労働力の結集という側面以上に重視しなければならない点がある。水田稲作への依存度が高まれば、水田の条件の良し悪しによって、経営主体間に経済的な優劣の差が生じやすくなる。また、天候の悪化をはじめとする自然的アクシデント、集団同士の争い、略奪等の人的なアクシデントなどによる突発的な減収が生じた場合のダメージ、リスクも大きくなる。こうした水田稲作をめぐる不均衡的・不安定的状況の表面化は、大局的には集落間の経済的不均衡を増幅し、有利な集落を中心にその自立性を高める方向に作用したと考えられる〔近藤1983：25-99頁〕。しかし、好条件をもつ集落であっても常に安定した生産を確保できる保証がなければ、その自立性の伸張は大きなリスクを伴うことになる。水田稲作への依存度を高めることは、一方で個々の集落の自立性を高めることの危険性を意識させることにつながるわけである。こうして、人口の増加と水田稲作への依存度の高まりは、人口増加による血縁関係の膨張も相まって、複数の集落の相互依存関係の強化を促すとともに、全体の存続に関わる共同体的規制が強く発現する場の形成に結びつくこととなる。

人口増加の初期段階における水田稲作は、大阪府の田井中遺跡の水田址にみられるように〔秋山2007：681-690頁〕、水源の確保も含め、小経営的な側面〔都出1989：469頁〕が強かったものと思われる。とすれば、先述の水田稲作に関わる労働力の集結は、大規模な水田面の形成、堰・水路の敷

設にしても、寧ろ、複数の集落同士の関係がある程度の進展を見せたのちに現れてくるものと考え
るべきだろう。つまり、人口の増加とともに、複数の集落からなる地域社会が形成される背景とし
ては、このような水田稲作への依存度の高まりによる、複数の集落の相互依存関係の形成と強化と
いう側面をより強調する必要があるのである。

d. 生活必需品の外部依存度の高まりと地域社会の形成

一方、地域内の人口の増加は、単位面積当たりの土器・石器・木器などの諸道具の生産量・消費
量の増加にもつながる。人口密度の高い定住的な農耕社会においては、個々の集落が利用できる資
源地も限られてくるため、近隣に良好な原材料が存在しない生活必需品の数量が必然的に増加する
ことになる。例えば、石製利器は用途ごとに石材の選択性が強く働くこともあり、木器・木材の使
用頻度の高まりとも絡み、各地で広範囲に及ぶ石材もしくは製品の流通が認められるようになる
[酒井 1974, 下條 1975, 安藤 1997 ほか]。

こうした石材・製品の生産・流通のネットワークは、各地で鉄器が増加し始めるころまで発達し
たことが知られている。一方、石製利器から鉄製利器への移行過程については、未だ意見の相違が
大きいものの、少なくとも南関東地方では、後期初頭とされる時期に石製利器がほぼ完全に消滅す
る。この時期までに石製利器を不要にする程度の鉄製利器が存在していたこと、そしてその移行が
きわめてドラスティックだったことは間違いない。つまり、南関東地方の後期に並行する時期には、
その量的な評価を別にすれば、東日本に及ぶ広範囲の鉄器の流通網が形成されていたことになる。

人口増加地域における、こうした石製・鉄製利器のあり方は、集落内で用いられる利器の一部あ
るいは大部分を外部に依存するという状況が、各地で生じていたことを物語る。そればかりでなく、
こうした諸道具や原材料の外部依存は、石や鉄以外のさまざまな素材あるいは製品をめぐるでも生
じていたことが知られている。例えば、河内平野の瓜生堂遺跡は、周囲の植物相の条件によって、
必要な木器・木材の一部を他の集落からの供給に依存していた [秋山 2007 : 672・673 頁]。また、
後期になると、東日本を含めて木器の未成品や加工具の出土数が減少しており [若林 2001 b : 41・42
頁, 安藤 2002 b : 119 頁]、限られた集団による生産を想定せざるを得ない状況となる。北関東地方
でも、一帯に生息しない樹種による製品が存在することが明らかになっており [山田 1986 : 174-175
頁]、やはり、地域社会の範囲を超えた製品・素材の流通が考えられる。人口増加地域において、
時期を追うごとに生活必需品の外部依存度が高まっていったことは間違いない。

こうした人口増加に伴う、生活必需品の外部依存度の高まり、あるいは生活必需品の流通量の増
加も、生産性の優劣を背景とし、集落間の不均衡を不断に拡大する原因になる。しかし、これも自
然的・人的な偶発的な事態によって、その供給が断たれる、あるいは減少する可能性が多分にある
がゆえに、そのリスクを軽減するための集落同士、あるいは地域社会間の相互依存関係を強化する
力に転化することになる。

つまり、人口増加地域における、地域社会の形成は、これまで述べてきた水田稲作をめぐる不安
定性・不均衡性の拡大と、石製利器・鉄製利器をはじめとする生活必需品の外部依存度の高まりに
よる、集落相互の関係性の深化と関連した現象として理解することができるわけである。というよ
り、個々の集落の存続において、こうした相互依存的関係の存在が不可欠となる状況が生じていた

と考えてもいいだろう。なお、人口の再生産を支えるための基礎的な欲求充足手段が調達される社会的関係の範囲を「全体社会」と呼ぶのであれば〔富永1996：90〕、人口増加地域においては、地域社会が「全体社会」に相当するものになっていたと考えることができる。しかし、地域社会は、「全体社会」としての側面を強く持ちつつも、その当初から一定度の地域社会間における生活必需品の交換等が行われており、また後期には地域社会間の経済的諸関係の重要性も増してくるため、その完結性を強調し過ぎてはならないだろう。

生活必需品の外部依存の高まりは、その規模に対する評価は別にしても、地域社会内における諸道具の生産をめぐる分業的關係の形成・展開と結び付き、また、時には地域社会間の分業的關係の形成をも促すことになる。北部九州地域や南関東地方などにみられる特定製作地で作られた石器の流通などは、ある意味で地域社会間の分業と評価することも可能である。こうした、地域社会内や地域社会間の分業的關係の進展は、地域社会内の集落の相互依存性を一層強化する方向に作用し、また地域社会同士の関係をも強く意識させることになったと考えてよからう。

e. 中期における平等志向の集落群と中心形成志向の集落群

先述のように、中期における南関東地方の定型的な環濠集落、大和・河内地域の大規模集落は、平等志向の集落群であり、これらは後期に至り中心形成志向へと変化を遂げる。一方、北部九州地域の地域社会は、その成立期から弥生時代を通じて中心形成志向と言えるものであった。

いずれの地域であっても、地域社会内には、多かれ少なかれ相互依存的な関係の維持と生産性の優劣を背景とした経済的不均衡の拡大との矛盾が生じることになり、そのなかで矛盾を止揚する共同体的規制の強化が進むことになる。本稿のタイトルとの絡みで言えば、そこに権力の生じる場の変化を重ね合わせることができるはずである。また、地域社会同士の関係においても、生活必需品の外部依存度が高まるとともに、その相互依存関係の重要性が高まり、やはり経済的不均衡との間に矛盾が生じるようになってくる。ここでは、上記の3つの地域の集落群のあり方の違いに対し、こうした地域社会内外の諸矛盾の拡大に対する共同体的規制の発現方向という観点を軸に、それぞれの地域の大陸との距離、自然環境の差異から説明を試みることにする。

北部九州地域における中心形成志向の集落群の形成の背景を考えるうえで、まず注目しなければならないのは、朝鮮半島との近接性という地理的・歴史的条件であろう。つまり、北部九州地域は、朝鮮半島から青銅器や原材料や個人墓への青銅器副葬に関する情報を入手しやすい条件にあり、それが青銅器をはじめとする遠隔地の希少品の集積で表象される個人の能力と、地域社会内の利害を調整する役割を結び付けることになったのである。しかし、遠隔地からの希少品の集積という行為自体は、集団の余剰の消費であるにしても、中心人物の本来の役割である地域社会内の利害調整と直接関係するものではない。そのため青銅武器類集積の能力が、地域社会をまとめる力の象徴として機能し得る社会の範囲は、その能力及び希少品の存在を直接見せることで成員の畏敬や尊敬の念を勝ち取り得る、限られたものとならざるを得なくなる。北部九州地域、特に玄界灘沿岸地域における比較的小規模な独立性の高い沖積平野の分布は、平野ごとの地域社会の形成を促すとともに、地域社会内において中心形成に向けての動きが生じるのに有利に働いたと考えることができる。

中心人物が存在する集落は、基本的に良好な経済的条件をもつ場所に形成されることが多かった

と思われ、そうした場所にはモノや情報が集まりやすく、ひいては人口が集中する力も働くことになる。こうした動きは、当然地域社会内の経済的不均衡を増幅する方向に作用するため、そこで生じる相互依存関係との矛盾の拡大は、地域社会内の利害調整を行う、集团的機能としての更なる中心の強化というかたちで止揚されることになる。北部九州地域において、地域社会内の集落の規模、内容が一定せず、中心人物の存在する集落が極端に大規模化する背景には、上記のような方向への共同体的規制の発現を想定することが可能である。

なお、楽浪郡成立後、北部九州地域では、集積するアイテムの中心が前漢鏡となり、同時に地域社会間の格差が顕著になってくる〔武末 2002：50-53 頁〕。鏡を入手する主体が福岡平野と糸島平野の中心人物にまとまり、そこから周辺の地域社会に供給されるような関係が成立していたものと考えられる〔下條 1991：92-95 頁、岡村 1999：73 頁〕。鉄器の普及が進み、地域社会間関係及び朝鮮半島・楽浪郡との交流が一層重要になる中で、二つの地域の中心人物が、地域社会間関係を調整する役割を担うだけでなく、その中心性を希少品の集積量で表示しようとしていたことがうかがわれる。

ただし、先述のとおり、希少品の集積に関わる個人の能力の顕示によって維持し得る社会的関係の範囲には限界があったはずである。また、後で述べるように、地域社会における中心人物の役割の拡大は、逆に個人の威信に対する余剰の投入を抑える方向にも作用する。北部九州地域では、その地理的・歴史的条件に支えられて、しばらくの間中心人物の威信に関わる希少品の集積と個人の死を契機とした消費という行為が継続したが、中期後半以降になって武器形青銅製祭器が発達したり、後期において厚葬墓が減少するのは、こうした点と関係したものと解釈することが可能である。

一方、大和・河内地域において、北部九州地域のような中心形成志向の集落群が形成されなかったのは、第一に、人口急増の初期に中心人物への青銅器の集積及び消費を可能とする条件がなかったことが関係していたとみていいだろう。また、これらの地域の沖積地が広く均質であることも、中心の形成を抑える方向に作用していたようである。こうした条件下では、経済的不均衡が拡大するなかでも、突出した優位性をもつ人物あるいは集落が一ヶ所に絞り込まれにくい。その結果、諸矛盾の拡大を、幾つかの集落が、互いに平等性を維持することで抑える、集落同士の関係が形成されることになったのである。これらの集落は、経済的優位性故に人口の集中現象が生じるが、対等な関係にある集落との関係のなかで、その突出が抑えられる。なお、河内・大和地域において青銅器が個人の能力と結び付かず、基本的に地域社会や地域社会のまとまりで共有される祭器として発達するのは、こうした平等志向の集落群の形成とも無関係ではないだろう。

最後の南関東地方の集落群は、集落規模が上記二つの地域に比して小さく、集落内の構造も単純である。そこには上記二地域との物質的生産量の格差が関係していたものとみていい。南関東地方では、大陸から遠いこともあり、青銅器が中心人物の能力の表象としても、共同祭器としても定着することはなかった。その一方で、平等的な関係にある集落が全て環濠をもち、かつ規模・内容ともに非常に定型性の高い集落となる点に注目すれば、環濠の掘削という共同労働、及び環濠による集落の規模・内容の同一性の視覚化・物象化が、地域社会のまとまりを維持するうえで、重要な意味をもっていたことが想定できる。青銅器祭祀等が発達しなかった分、集落の景観・規模の同一性への意識が高まっていた可能性が考えられよう。

南関東地方では、平等志向の定型的環濠集落のほかに、集落内大型方形周溝墓をもつ中核的集落

の存在が明らかになっている。集落内大型方形周溝墓のあり方は、被葬者の中心性が必ずしも固定化されていない状況を示すものであったが、逆にこのことは、断続的であれ平等志向の集落間関係では調整困難な状況が生じていたことを物語ると考えられる。鉄器の普及が進み、地域社会間関係の重要性が増すなかで、地域社会内外の諸矛盾に対応する地域社会の中心人物の役割が大きくなっていたことが想定できる。

なお、南関東地方では、水田稲作中心の集落が形成される中期中葉に、中里遺跡のような4万㎡に達する居住域をもつ大規模な集落が形成されていた。また、埼玉県池上・小敷田遺跡では、比較的狭い範囲に複数の居住単位が集まる様子が復元されている。こうした中期中葉における人口の集中現象は、人口増加初期における相互依存関係の拡大にあたり、良好な条件をもつ場所に集団が集住したものと理解することができよう〔設楽2006:144頁〕。つまり、南関東地方の農耕社会の形成の初期段階には、一時的に中心形成志向が認められると言えることになる。中期中葉の方形周溝墓群には、後の集落内大型方形周溝墓と同等の規模の周溝墓が存在していたことも知られており、この点も中心形成志向的な動きと評価することが可能である。

こうした中期中葉の集住型の集落では、さらに人口が増加すると、当然一ヶ所に集住することの効率性が低下してくるはずである。その際、北部九州地域のような中心人物の顕在化を促す契機がない場合、大規模な集落は、相互依存関係を保ちながら幾つかの集落に分れて分散するようになる。それが中期後葉の平等志向の地域社会の形成につながったのだろう。このように見てくると、中期後葉の中核的集落の存在や、集落内大型方形周溝墓の形成は、こうした中期中葉における一時的な中心形成志向の集落を基盤として展開したものと考えることが可能になる〔石川2001:79頁〕。

f. 後期における中心形成志向の集落群の展開

さて、以上のような地域ごとの差異が認められた中期に対し、後期になると地域社会の中核的な集落（群）が明確化する一方で、いずれの地域でも地域社会の中心人物の存在が目立たなくなるといった共通性をもつようになる。こうした集落群の変化は、鉄器の普及を含めた地域社会の外部依存性の高まりと、地域社会間の関係性の深化によって説明することが可能なのである。

鉄器の普及については、北部九州地域で中期後半に、大和・河内地域や南関東地方では後期初頭に画期がある。以後、東日本南部以西では、地域ごとに鉄器の絶対量に大きな差があったにせよ、時期を追うごとに生活に必要な利器の外部依存度が高まっていたものと考えられる。さらに、後期における各地の木器未成品の出土量の減少は、鉄器の普及とともに、木材や木製品の分業的生産及び外部依存度も進展していたことを物語るものである。つまり、後期の地域社会は、全体社会としての側面を持ちつつも、もはや安定した地域社会間関係を前提としなければ、存在し得ないものになっていたと考えることができる。

このような地域社会間における生活必需品の流通量の増加は、そのルートの固定化と結節点の形成を促し、同時に相互の交渉の代表者たる特定の人物・集団の存在を不可欠なものとする。またそれは、地域社会内部においても、生活必需品や情報の集中と分配という流れの形成を進展させ、その調整を行う人物・集団の存在の希求へとつながる。つまり、生活必需品や情報の動きの活発化と表裏一体的に進む経済的不均衡の拡大に対し、それを抑える共同体的規制発現の場（権力の所在）

が、複数の集落の平等的関係から、特定の個人や集団へと移行することになるわけである。こうして、個々の集落の優劣が顕在化しても、各集落に生活必需品や情報を行き渡らせることが可能な社会関係が形成され、大和・河内地域と南関東地方では、集落規模に差異のある中心形成志向の集落群へと変化し、北部九州地域でも中期後半以降に集落規模の格差が拡大したわけである。

条件に応じて集落の規模をフレキシブルに変化させることが可能な中心形成志向の集落群は、平等志向の集落群より、地域の自然環境への適応度が高くなる。南関東地方の後期中葉以降に人口が再び急増するのは、主にこうした点によるものと考えられる。それは、鉄器の普及による生産効率の向上以上に、人口動態に作用していた可能性も高い。各地の後期における人口変化の詳細を知ることが容易ではないが、仮に多くの地域で人口の増加が生じていたとすれば〔石川 1992：131 頁、小澤 1999：103 頁〕、東日本南部以西の中期後半～後期は、鉄器をはじめとする生活必需品の生産量・流通量の増加をはじめ、集落群構成の変化と環境への適応度の向上、それらと関連して生じた人口の増加、さらには共同体的規制発現の場としての中心の顕在化や地域社会間の関係の深化といった側面が、相互に関連しながら展開していた時期として捉えられることになる。

ところで、後期の和・河内地域や北部九州地域では、こうした集落群の変化とともに、画一性の高い大型青銅製祭器を用いた共通の祭祀の執行が、地域社会間関係において重要な意味を持つようになっていた。また、北部九州地域では、こうした祭祀の発達とともに厚葬墓が衰退し、大和・河内地域でも、中心形成志向の集落群になりながら、やはり中心となる個人の存在が中期よりも不明瞭になる。

先述のとおり、北部九州地域で発達した多量の希少品の集積で表象される個人の能力の顕示では、広範な地域社会及び地域社会間関係の安定化は難しかったと考えられる。これに対し、大型青銅製祭器を用いた祭祀の共有は、社会的関係の象徴たる青銅器そのものと、それを用いた祭式が各地域社会に共有されることから、地域社会間関係の構築・再構築に対して有利に働くことになる。それ故に、後期における地域社会間の関係性の進展とそこで生じる不均衡の拡大に対し、画一性の高い大型の青銅製祭器の製作とそれを用いた祭祀様式の共有が必要になったのであろう。

北部九州地域では、福岡平野が、大型青銅製祭器の製作・分配の中心であったことが明らかになっており、近畿地方でも、近畿式銅鐸の画一性からみて、やはり祭祀を共有する地域社会群の中心が存在していた可能性が高い。大型青銅製祭器は、祭祀の共有という地域社会間の平等的な関係を前提としつつも、その一元的な製作と供給という流れのなかで、中心の所在を明示することを可能にする。しかし、この中心―周辺の関係は、中心における大型青銅製祭器の製作と供給、周辺における消費が継続することによってのみ再生産が可能になるものである。そうしたなかで、地域社会間の不均衡の拡大が続けば、分配・消費される青銅製祭器の量的拡大が求められることになる。そのために、北部九州地域、近畿地方では、大型青銅製祭器の生産・分配に余剰の投入が集中し、近畿地方では銅鐸が加速度的な大型化を遂げ、北部九州地域では、個人墓への希少品副葬に対する余剰投入が抑えられることになったのである。

さて、最後の南関東地方でも、後期においては、鉄器をはじめとする生活必需品の生産量・流通量の増加と、人口の増加、地域社会間の関係性の深化、そして地域社会の中心人物の役割の拡大が、相互に関連しながら展開していたと理解できる。しかし、南関東地方では、祭祀への余剰の投入と

いう現象は生じていないため、中心人物の存在は、地域内の余剰を背景に生活必需品や情報を安定的に獲得し、かつそれを地域社会内に軋轢を生じさせないように分配するという役割そのものによって、支えられていたと考えざるを得ない。とはいえ、こうした生活必需品や情報のコントロール（広義の再分配システムと言ってもいいだろう）は、日常的なものでありかつ地域社会全体の利害に直結するが故に、生活必需品や情報が行き渡る範囲全体に中心人物の役割に対する認識が及ぶと考えることもできる。一方、こうした中心のあり方は、特定の個人的利益の発生を抑える方向に作用することが予想されるため、墓制等による中心の存在の顕示へと余剰が投入されることも生じなかったのだろう。

筆者は、南関東地方に限らず、各地の後期の地域社会において、物質的生産量の増加と中心人物の役割が拡大しているにも関わらず、特に墓制のうえでその存在が不明確になる背景には、上記のような生活必需品や情報の流れと深く絡んだ社会的関係の再生産が重要な役割を果たしていたものと考えている。南関東地方後期の状況は、物質的生産量の相対的な少なさ故に、そうした社会的関係が純粋なたちで現れたものと理解しておきたい。

つまり、各地の後期においては、地域社会内外の諸矛盾の拡大に応じ、地域社会の中心人物の役割が大きくなることで、逆に地域社会内部においては中心人物の諸活動を地域社会全体の利害に関わる部分に限定させる動き、つまり階級的利益の発生を抑えようとする力〔鬼頭1982：18頁など〕が生じていたことになる。そうしたなか、中期において青銅器祭祀を発達させていた近畿地方や北部九州地域では、地域社会間で共有される祭祀としての性格を強く示しつつも、中心性を明示することが可能なかたちへと青銅器祭祀のあり方を変化させていったのである。なお、近畿地方では、中期の大規模集落において独立棟持柱をもつ巨大な掘立柱建物が発達していたことが知られているが、後期では今のところ同等の規模の建物址は発見されていない。このことは、中期の巨大な建物が、平等志向の地域社会内関係において意味をもつものであったことを示すとともに、後期の地域社会においては階級的利益の発生を抑制、青銅器祭祀への余剰の投入が徹底して行われていたことを物語るものと考えられる。

2) 地域社会の変化とイデオロギーの関係をめぐって

a. 前方後円墳時代の具象的表現の構造と弥生時代「絵画」との比較

ところで、筆者は、以前、前方後円墳時代後期の装飾付須恵器の小像群の構造分析を行い、弥生時代「絵画」との比較を行ったことがある〔安藤2004：135-140頁〕。その結果、装飾付須恵器小像群には、弥生時代「絵画」と共通するモチーフが複数認められるだけでなく、「水と地」「人間と自然」「男性と女性」という3つの対立軸と、前者が優位に立つという、弥生時代「絵画」と同じ構造を読み取ることができた。これは、弥生時代「絵画」の世界観と装飾付須恵器の世界観との連続性を示すと同時に、弥生時代の世界観を『記・紀』等の世界観にまでつなげることを可能にし、併せて、何故、弥生時代「絵画」の意味を読み取る際に、古代の文献が有効であったのかを説明し得る成果になったと考えている。

一方で、弥生時代「絵画」と装飾付須恵器小像群には、無視し得ない大きな相違点も存在していた。例えば、弥生時代「絵画」における人間の世界は、狩りをする人物、工字状工具をもつ人物、

脱穀、高床式建物をはじめとする建物などの複数のモチーフで表現されており、人物の表現にしても、特定の個人、あるいは物語の主人公を意識的に描き分けるような工夫を認めることができない。これに対し、装飾付須恵器では、3つの対立軸において優位に立つ側が、飾り馬に乗った下美豆良の男性になることが多く、この人物が、小像群で表現されている世界の中心に位置づけられていたようである。つまり、前方後円墳時代後期においては、3つの対立軸において優位に立つ主体を、人間あるいは男性全体ではなく、ある特定の男性に代表させるかたちで表現しているわけである。

この両者の相違点は、「絵画」の多くが描かれた弥生時代中期と、装飾付須恵器の作られた前方後円墳時代後期の社会の違いを反映している可能性が高いとみていいだろう。個々の地域にまで大王を中心とする階層的秩序の末端が伸び始めていた前方後円墳時代後期において、世界の中心となる特定の人物が物語の主人公になることは、『記・紀』の記述内容を取り上げるまでもなく容易に想像できるはずである。

この装飾付須恵器小像群の主役である馬上の人物の性格については、形象埴輪との比較することでより明確になると思われる。前方後円墳時代後期の形象埴輪には、飾り馬をはじめ、両手でささげる姿勢をとる女性像、相撲（力士）、シカ、イノシシ、イヌ、ミズドリ、船など、装飾付須恵器の小像群と共通するモチーフが多数存在する。というより、装飾付須恵器に登場するモチーフのほとんどは、形象埴輪と共通するものになっている。

そこで装飾付須恵器と形象埴輪における、これら共通したモチーフのあり方を比較すると、装飾付須恵器においては、ミズドリと力士を除く多くが、下美豆良の男性と何らかの関係をもって存在していることがわかる。つまり、飾り馬には男性が騎乗し、女性像はその騎乗の男性に向けて何かを捧げる姿勢をとる。またシカは矢を放たれ、イノシシは男性に馬乗りになされる。船にも人物が乗っている表現が認められる点などである。また、相撲に関しても力士が単独で表現された例はなく、組み合わせる2人の人物として表現されている。

これに対し形象埴輪では、これらのモチーフが、他の人物像や動物と有機的な関係をもつことはほとんどない。飾り馬は空馬であり、捧げる女性像の対象も明確ではない。シカ、イノシシには矢負い表現のあるものが見られるが、その矢を放った人物は基本的に表現されていない〔若松 2004：171・172〕。力士も当然組み合わせることはなく単独で存在する。つまり、形象埴輪には、装飾付須恵器において表現されていた主人公が存在しないことになるわけである。形象埴輪に被葬者を顕彰する意味があるとするならば、古墳の被葬者が不在の主人公であることは間違いないところであろう。つまり、装飾付須恵器や多くの形象埴輪が造られた前方後円墳時代後期においては、古墳の被葬者である大王や首長が、人間の世界の形成を担う中心的存在として認識されていたことになるのである。

となると、逆に、弥生時代中期において、人間の世界が複数のモチーフで表現され、かつ特定個人の存在が不明確であるという点は、自然を超越すべき主体が、人間全体あるいは男性全体として考えられていたことを示唆するものとなる。先述のように、弥生時代「絵画」の世界観は、自然と人間の世界が不平等な対立関係を内包することを基本とするものであったが、男性と女性という優劣関係を除けば、人間あるいは男性の世界の中は、基本的に平等的なものの意識されていた可能性があるということである。

b. 弥生時代「絵画」と前方後円墳時代前半期の家形埴輪の比較

そこで問題となるのは、人間の世界のなかにおける不平等的表現がいつから認められるかという点である。この点については、弥生時代と前方後円墳時代の建物表現が手掛かりになるように思われる。

弥生時代の建物表現をもつ「絵画」は、銅鐸、土器ともに認められるが、銅鐸「絵画」の例は3例のみで、その他のほとんどは中期後葉を前後する土器に描かれたものである。さらに、それらも、唐古・鍵遺跡、清水風遺跡を中心とする大和盆地の資料が圧倒的に多く、残りはそこから西側の中国・四国地方にかけて点々と分布する程度となる（表1）。

これらの建物表現には、切妻造と寄棟造の2つの屋根の表現が認められる。このうち、切妻造のものは、2間以上の柱間をもつ高床式の建物として描かれるようであり、独立棟持柱をもつものも少なくない。梯子表現がある場合は、基本的に柱の外側につくという特徴も指摘できる。一方、寄棟造には1間のものと2間以上の表現があり、さらに幾つかの建物の種類に分類することも可能である。例えば、1間のものは背の高い高床式の建物となることが多く、2階建の表現もあることから楼観のような建物と考えられている。また2間以上のものにも、梯子をもつものとなないものがあり、高床式と平地式の双方が含まれていた可能性も考えられる。寄棟造の場合、梯子表現は柱の間となることが多くなっているが、厳密なものではない。いずれにせよ、弥生時代「絵画」の建物表現に複数の種類の建物が含まれていたことは、間違いのないであろう。

土器「絵画」の場合、寄棟造の屋根に独立棟持柱を加える例などが存在するように、建物表現自体が必ずしも厳密な約束事のもとで描かれているわけではない。また、破片資料が多いということもあり、これらを細かく分類し、それぞれを数量で比較することは控えたほうがいだろう。ただ、「絵画」全体としてみた場合、切妻造の高床式建物が優勢であり、また、屋根型式に関わらず、高床式と考えられるものが多いことは指摘できそうである。銅鐸「絵画」例も、菱環鈕2式の井向2号銅鐸と扁平鈕式の伝香川県銅鐸に切妻造高床式建物が描かれ、外縁付鈕1式の井向1号銅鐸にも、屋根型式は不明であるが、柱間2間、外梯子の背の高い高床式建物が描かれている〔春成2003:61〕。土器に比して銅鐸の「絵画」のほうが、よりその約束事に忠実であるとすれば〔安藤2006b:97頁〕、本来は、穀倉あるいはそこから変化した祭祀的な建物と考えられる〔金関1985:73・74頁〕、切妻造の高床式建物を描くことに意味があった可能性が高くなる。中期後葉の土器「絵画」では、描き手の裾野が広がる（より集落成員一般に近くなる）ことによってその約束事に揺らぎが生じ、さまざまな建物表現のバリエーションが追加されたのであろう。

土器「絵画」の建物表現において、切妻造の高床式建物が数のうえで優勢になっているのは、以上のような理由によるものと思われる。しかし、一方で、土器「絵画」では、切妻造の高床式建物が他の建物表現の数を圧倒しているわけではない。それだけでなく、屋根に付される棟飾等の表現においても、特定の種類の建物が特別な扱いを受けている様子はみられない。複数の種類の建物を描いた中曽司遺跡例や養久山前池遺跡例においても建物表現に格差はなさそうである。つまり、土器「絵画」に追加されていった建物表現のバリエーションは、いずれも等価なものとして描かれていた可能性が高いことになる。

もちろん、この時期の近畿～中国地方の実際の集落には、池上・曾根遺跡例・武庫庄遺跡例をは

表1 弥生時代「絵画」における屋根型式の判明する建物表現

遺跡名	所在地	器種	時期	切妻	寄棟	建物の装飾・他	文献
唐古・鍵	奈良県田原本町	壺	中期後葉?	1		梯子	京都帝国大学文学部考古学研究室 1937, 第 59 図 7
		壺	中期後葉?	1		独立棟持柱?・樹串	京都帝国大学文学部考古学研究室 1937, 第 63 図 2
		壺	中期後葉?	1?			京都帝国大学文学部考古学研究室 1937, 第 63 図 1
		壺	中期後葉?	1			奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 26 頁
		壺	中期後葉?	1			金関 1985, 図 1-6
		壺	中期後葉		2	屋根の上にトリ? 2 棟とも渦巻棟飾	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 181
		壺	中期中葉	3		2 棟千木, 1 棟樹串	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 182
		壺	中期後葉	1		渦巻棟飾	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 183
		壺	中期後葉		1	渦巻棟飾	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 190
		壺	中期後葉		1	渦巻棟飾	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 193
		壺	中期後葉?	1		千木?・独立棟持柱?	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 27 頁 2
清水風	奈良県田原本町	壺	中期後葉?	1			奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 27 頁 3
		壺	中期後葉		1	屋根の上にトリ? 渦巻棟飾	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 171
		壺	中期後葉		1	渦巻棟飾, 2 層?	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 172
		壺	中期後葉	1			大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 174
		壺	中期後葉	1		渦巻棟飾?	大和弥生文化の会 2003, 第 59 図 191
		壺	中期後葉?		1		奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 28 頁 2
		壺	中期後葉?	1		1 間, 柱間に垂直方向の梯子	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 28 頁 3
		壺	中期後葉?	1	1	1 間, 柱間に梯子	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 28 頁 4
		壺	中期後葉?	1	1	長い垂直方向の梯子のみ	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 28 頁 5
		甕	中期後葉?	1?		渦巻棟飾	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 29 頁 2
		水差	中期後葉		1		奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 30 頁 1
八尾九原	奈良県田原本町	壺	中期後葉	1?		独立棟持柱	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 31 頁 1
長寺	奈良県天理市	壺	中期後葉?	1		独立棟持柱, 渦巻飾	大和弥生文化の会 2003, 第 56 図 173
芝	奈良県桜井市	甕	中期後葉		1	樹串	市村 1996, 41 頁
		壺	中期後葉	1		入母屋状	大和弥生文化の会 2003, 第 56 図 175
四分	奈良県橿原市	壺	中期中葉	2?		独立棟持柱, 渦巻棟飾, 樹串	大和弥生文化の会 2003, 第 56 図 176
中曾司	奈良県橿原市	壺	中期後葉	2	3	共に樹串, 梯子のあるものに柱なし	大和弥生文化の会 2003, 第 57 図 178
東奈良	大阪府茨木市	壺	中期後葉	2		太線の逆位切妻建物あり	大和弥生文化の会 2003, 第 58 図 180
大塚	大阪府高槻市	壺	中期後葉?	1			奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 37 頁 2
瓜生堂	大阪府東大阪市	壺	中期後葉?	1		千木?	佐原 1980, 107 頁
池上曾根	大阪府和泉市	壺	中期後葉?	1		千木?・樹串	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 28 頁 1
		壺	中期後葉?	1		櫛描文, 独立棟持柱・梯子	和泉市教育委員会 1998, 111 頁
男里	大阪府泉南市	水差	中期後葉		3	独立棟持柱	和泉市教育委員会 1998, 134 頁
川島川床	兵庫県太子町	壺	中期中葉	1		棟飾	山崎 2006, 133 頁
頭高山	兵庫県神戸市	壺	中期後葉?	1?		独立棟持柱	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 31 頁 2
養久山前地	兵庫県龍野市	壺	中期後葉	1	2	独立棟持柱?	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 52 頁 2
稲吉	鳥取県淀江町	壺	中期中葉	1?	1	丸飾, 切妻・棟飾, 寄棟・梯子	兵庫県立博物館 1995, 37 頁 109
雄町	岡山県岡山市	壺	中期後葉			切妻: 樹串・独立棟持柱?, 寄棟: 長梯子	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986, 24・25 頁
		壺	中期後葉	1	2		梅木・三吉 2006, 図 2-23
窪木	岡山県総社市	器台	中期後葉		1		梅木・三吉 2006, 図 2-24
新庄尾上	岡山県岡山市	壺	中期後葉		1		梅木・三吉 2006, 図 3-28
久米池南	香川県高松市	壺	中期後葉	1		棟飾	梅木・三吉 2006, 図 4-32
別名寺谷 I	愛媛県今治市	高坏	中期後葉	2	1	独立棟持柱・千木?・樹串	梅木・三吉 2006, 図 2-18
田村	高知県南国市	壺	中期後葉		1	いずれも樹串, 切妻: 独立棟持柱	梅木・三吉 2006, 図 2-15
						棟飾?	梅木・三吉 2006, 図 2-17

じめ、独立棟持柱をもつ巨大な切妻造建物が存在していた。これらも、やはり穀倉から発達した祭祀的な施設と考えられるものであり、集落の中心的なモニュメントになっていた可能性も高い。しかし、「絵画」をみる限り、そうした現実の建物の差異を強調するような表現は存在しないのであり、あくまでも建物群を平板的に描ききっている。こうした点にも、人間の世界を平等的に描くという、弥生時代「絵画」の特徴の一端をみることができるようである。

次に前方後円墳時代の建物表現に目を転じてみよう。表2は、前方後円墳時代前半期（前方後円墳集成6期まで）の、屋根型式のわかる複数の家形埴輪がまとまって出土した代表的な例を集めたものである。これらの家形埴輪には、切妻造、寄棟造、入母屋造、片流造の4つの屋根型式が存在し、さらにそれぞれが複数の種類の建物に分かれていたものと考えられる。ここで注目されるのは、これらの埴輪群の中に、その中心となる大型のものや特別な装飾をもつものが存在する点である〔青柳2000：140-141頁〕。白石稲荷山古墳例では、東棺出土埴輪群に大型の切妻造建物が存在し、赤堀茶臼山古墳例では、堅魚木をもつ大型の切妻造建物がみられる〔東京国立博物館1983：178, 230頁〕。石山古墳では、後円部の家形埴輪群に、妻側に斗束を表現した（堅魚木がつく可能性あり）大型入母屋造建物が〔三重県埋蔵文化財センター2005：27頁〕、宝塚古墳でも、造出近辺出土埴輪群に、鰭飾や堅魚木をもつ入母屋造高床式建物がまとまっている〔松坂市教育委員会2005：98-102頁〕。室大墓古墳では、堅魚木と直弧文装飾をもつ大型入母屋建物が中心となり、行者塚古墳の東西造出、月の輪古墳造出、沖出古墳にも、鰭飾をもつ大型入母屋造建物が出土している。

こうした中心的な建物の存在は、家形埴輪群に格付、つまり不平等が存在し〔小笠原1985：31頁〕、またそれを古墳において表現する意味があったことを示している。中心的建物には、どうやら地域差があるようであり、群馬県の2例が切妻造建物を中心としているのに対し、西日本の諸例では入母屋造建物が多くなっている。家形埴輪群の性格についてここで整理をする余裕はないが、それが、生前・死後の居館であれ、殯宮であれ、被葬者の霊の形代・依代として存在していたのであれば〔小林1951：246頁〕、その中心となる建物が被葬者の性格と直結したものと見なすことに問題はなからう。とすれば、群馬県を中心とする東日本では切妻造建物が、西日本では入母屋造建物が、被葬者を表象する建物として認識されていた可能性が高いということになる。ちなみに、こうした建物群の格付や、西日本における入母屋造建物の中心化は、前方後円墳時代前期に製作された家屋文鏡からも読み取ることが可能である〔車崎2000：26頁〕。つまり、前方後円墳時代前半期においては、被葬者の表象である中心的建物を頂点とする、建物の不平等な表現が定着していたことになる。

c. 人間の世界の不平等性を容認する世界観の形成

とはいえ、古墳における建物表現にみられる不平等性は、あくまでも社会の中心人物の埋葬の場でのことであって、その点で直ちに弥生時代「絵画」の建物表現との比較を行うべきではなからう。そこで最後に、弥生時代における墳丘墓の成立・展開と前方後円墳の形成までの流れを、弥生時代中期から後期の地域社会・地域社会のまとまりにおける祭祀の変化と関連づけることで、両者の関係について整理をしてみたいと思う。

先述のように、弥生時代後期の大和・河内地域（近畿地方）と北部九州地域では、地域社会間関係の深化にともなう地域社会の中心の役割の拡大と、その階級的利益の発生・拡大を押さえようと

表2 複数の家形埴輪を出土した古墳

遺跡名	所在地	墳形	全長	時期	出土位置	切妻	寄棟	入母屋	片流	備考	文献
白石稲荷山古墳	群馬県藤岡市	前方後円	170 m	5	墳頂東棺	◎				中心的建物	後藤守一・相川龍雄 1936
					墳頂東棺	○					
					墳頂東棺	○					
					墳頂東棺	○					
					墳頂東棺		○			倉	
					墳頂西棺	○				倉	
					墳頂西棺	○				倉	
赤堀茶臼山古墳	群馬県赤堀町	帆立貝	59 m	6	墳頂	◎				中心的建物，堅魚木	後藤守一 1933
					墳頂	○					
					墳頂	○					
					墳頂	○				倉	
					墳頂	○				倉	
					墳頂	○				倉	
					墳頂	○				倉	
宝塚1号墳	三重県松阪市	前方後円	111 m	4	造出			◎		中心的建物，堅魚木	松坂市教育委員会 2005
					造出			◎		中心的建物，鰭飾	
					造出			◎		中心的建物，鰭飾	
					造出			○			
					造出	○				囲内部	
					造出	○				囲内部	
石山古墳	三重県鈴鹿市	前方後円	120 m	4	墳頂			◎		中心的建物，斗束	三重県埋蔵文化財センター 2005
					墳頂	○					
					造出			◎		中心的建物	
					造出	○				倉	
					造出		○			倉	
					造出				○	倉	
					造出			◎		中心的建物	
					造出			○		円柱式	
					造出	○					
					造出	○					
庵寺山古墳	京都府宇治市	円	56 m	4	墳頂	○					宇治市教育委員会 1990
					墳頂		○				
					墳頂		○				
					墳頂			◎		中心的建物	

遺跡名	所在地	墳形	全長	時期	出土位置	切妻	寄棟	入母屋	片流	備考	文献
ニゴレ古墳	京都府弥栄町	円	30 m	6	墳頂		○				弥栄町教育委員会 1988
					墳頂		○				
					墳頂		○				
					墳頂	○					
					墳頂	○					
					墳頂	○					
高廻り 2 号墳	大阪府大阪市	方	—	4	周濠	○					大阪市文化財協会 1991
					周濠	○					
					周濠			◎		中心的建物	
					周濠			○			
					周濠			○			
					周濠			○			
					周濠			○			
					周濠		○				
一ヶ塚古墳	大阪府大阪市	円	45 m	4～5	周濠	○					大阪市文化財協会 1990
					周濠	○				倉	
					周濠		○			倉	
					周濠		○				
野々上古墳	大阪府羽曳野市	方	20 m	4	周濠	○					羽曳野市教育委員会 1980
					周濠	○					
					周濠	○				倉？	
					周濠			○			
					周濠			○			
					周濠			○			
行者塚古墳	兵庫県加古川市	前方後円	99 m	5	西造出			◎		中心的建物，鰭飾	加古川市教育委員会 1997
					北東造出			◎		中心的建物，鰭飾	
					北東造出	○				倉	
					北東造出				○	倉	
					東造出	○				堅魚木・鳥・囀形	
					？	○				千木・鰭飾	
室大墓古墳	奈良県御所市	前方後円	238 m	6	墳頂			◎		中心的建物，堅魚木・直弧文	秋山日出雄・網干善教 1959
					墳頂		○				
					墳頂	○				倉	
					墳頂	○				倉	
月の輪古墳	岡山県棚原町	円	60 m	4～5	墳頂	○				H 4	近藤義郎・他 1960
					墳頂	○				鰭飾，H 5	
					墳頂			◎		中心的建物，鰭飾，H 7	
沖出古墳	福岡県稲築町	前方後円	70 m	4	墳頂			◎		中心的建物，鰭飾・直弧文	稲築町教育委員会 1989
					墳頂			◎		中心的建物，鰭飾	
					墳頂	○？					

する方向に作用する共同体的規制の強化、さらに地域社会関係における不均衡の拡大といった現象が絡むなかで、大型青銅製祭器を用いた祭祀が発達することになった。一方、両地域に挟まれた中国地方では、中期までは同様の青銅製祭器を用いた祭祀の発達が認められるものの、後期になるとそうした祭祀が打ち切られ、墳丘墓が発達し始める。

これらの墳丘墓は、中国山地や山陰中部地域、丹後地域などのいくつかの地域で形成され、後期後葉にかけて、墳丘の形態や埋葬施設、儀礼用のアイテムなどに、強い地域的な共通性を発達させるようになる。また、一部にやや大型のものや特異な形態のものが認められるものの、基本的に墳丘墓の構造・内容に隔絶した差はない。これらの地域における中期までの青銅製祭器の発達、そして近畿地方や北部九州の大型青銅製祭器の主要分布範囲との排他的な関係を加味すれば、こうした特徴をもつ墳丘墓の発達が、近畿地方、北部九州地域の大型青銅製祭器の発達と同様、祭祀の共有による地域社会間関係の形成と維持という意味・機能をもっていたと考えることができるはずである。

墳丘墓は、地域社会成員の集団労働を直接視覚化・物象化するものであるため、環濠の掘削と同様、地域社会内の共同性の強化と結び付きやすい。さらに青銅製祭器のように原材料を地域社会外に依存する必要がない点で、祭祀を安定的に継続させられる点でも有利である。これらの墳丘墓が、大和・河内地域や北部九州地域ではなく、両者に挟まれた地域で先行して発達したのは、まず地形的に個々の地域社会の規模が小さく、地域社会のまとまりも、大和・河内地域や北部九州地域に比べて、相対的に小さかったことが関係しているものと考えられる。そのため、青銅製祭器の生産強化の限界を回避するために、別のかたちの共同祭祀が模索されたのだろう。一方で大和・河内地域や北部九州地域は、祭祀を共有する範囲・集団の規模が大きく、原材料を入手するための余剰の集積が可能であったこと、また両地域で大型青銅器による祭祀を競うように発達させていたこともあり、青銅器祭祀の発達がしばらくの間継続したのである。

その後、こうした墳丘墓の地域的まとまりは、幾つかの段階を経て、前方後円形の墳丘墓（前方後円墳）の出現とともに、より大きな地域的まとまりを形成する。この時期に至り、近畿地方と北部九州地域も、極限まで巨大化した青銅器祭祀を突如として打ち切り、前方後円形墳丘墓祭祀のまとまりに参画した。大型青銅器祭祀は、その拡大再生産を続けていけば原材料入手の面でも、技術的側面においても、いずれ限界点に到達する。一方、墳丘墓祭祀は、祭祀を共有する社会のまとまりの拡大に対して、より柔軟な対応が可能だけでなく、地域社会間で共有される共同祭祀の意味・機能を維持しながら、地域社会の中心の所在を内外に顕示できるという特徴もある。近畿地方、北部九州地域それぞれの広範な地域社会のまとまりのなかで、それまで強力に抑え込まれていた中心個人への余剰消費が、墳丘墓祭祀の特質と絡んでついに行なわれるようになったわけである。

前方後円形墳丘墓あるいは初期の前方後円墳は、それまでの墳丘墓祭祀の共通性を大きく超えた範囲に広がっている。また、ほぼ同時に、東日本南部においては、前方後方形の墳丘墓が広く展開していた。これは、近畿地方・北部九州地域の青銅器祭祀のまとまり、さらには東日本を含めた広い範囲で、祭祀を共有する地域の解体・再編が行われたことを物語るものである。今のところ、その背景は明らかになっていないが、前方後円形、前方後方形ともに、その主要な分布範囲からはずれて点的に孤立した分布を示す例が存在していることからしても、直ちに東日本南部以西の地域社

会全体が、前方後円形、前方後方形等の墳丘墓祭祀の共有に動いたわけではなく、最初は飛び石的あるいはモザイク的な共有関係からスタートしていた可能性が高そうである。

一方、前方後円形墳丘墓あるいは初期の前方後円墳は、すでに大和盆地のものが墳丘規模をはじめとする複数の側面で他地域を凌駕する突出性を示していた。こうした現象は、それまでの墳丘墓・青銅器祭祀において、それほど明確ではなかった特徴である。ほぼ同じ時期に東日本南部に広く展開する前方後方形墳丘墓（前方後方墳）にも、こうした状況をみることはできず、そこに前方後円形墳丘墓あるいは初期の前方後円墳の特異性を指摘することができよう。

近畿地方では、銅鐸祭祀が突然終焉を迎えるまで、銅鐸そのものが巨大化を続け、その終末期においては、三遠式銅鐸を統合してより画一性を強めることが明らかになっている。同じ時期には、北部九州地域でも広形銅矛という大形の青銅製祭器が生産されていたが、祭器の製作に投入された青銅の総量においては、近畿式銅鐸が大きくリードしていた。つまり、近畿地方では、北部九州地域以上に青銅器祭祀の共有に対し、大きな余剰とエネルギーを注いでいたことになるわけである。

一方、後期の青銅器祭祀は、参加する地域社会の平等性を前提としながらも、その原材料の入手から製作、分配においては、寧ろ中心と周辺という関係を明確に意識させるものであった。銅鐸が極限まで大型化した終末期の様相は、その背後にある中心—周辺の優劣の差が非常に大きくなっていたことを示唆するものである。つまり、前方後円形墳丘墓・初期前方後円墳にみられる明確な中心形成の動きは、墳丘墓祭祀への転換によって、銅鐸祭祀では見えにくかった地域社会間の中心—周辺関係が、一転して視覚化されたものと解釈することができるわけである。ただし、地域社会の優劣差の視覚化を強力に抑えていた弥生時代の祭祀のあり方からすると、この変化は、当時の東日本南部の地域社会全体にきわめて大きなインパクトを与えるものだったことが想像できる。前方後円墳祭祀への転換とともに、祭祀を共有する地域社会の範囲が大きく再編成されるのは、こうした中心の視覚化と祭祀に参加する地域社会の序列化に対する、個々の地域社会の対応に、大きな差があったことを示していると考えられることもできる。

ここでこうした祭祀の変化に、先述の弥生時代「絵画」と家形埴輪の違いを重ね合わせてみよう。弥生時代後期の墳丘墓祭祀も前方後円墳祭祀も、青銅器祭祀と同様、祭式の共有により地域社会の相互依存関係を維持する意味・機能があったと考えられる。こうしたなか、墳丘墓祭祀が定着した地域では、地域社会の中心人物が祭祀の主役としての位置を確保することになり、後期に中心形成志向の集落群へと転換する近畿地方においても、先述のとおり、銅鐸祭祀が中心—周辺関係の拡大再生産に結び付く方向に変化を遂げていた。となると、こうした弥生時代後期における地域社会や地域社会間の祭祀の変化とともに、人間の世界を平等に表現する世界観から、地域社会の中心人物が人間の世界を代表するという不平等的な世界観への変質が生じていた可能性が浮かび上がってくることになる。

弥生時代後期には、建物を表した「絵画」の確実な例は存在しないが、家形土器、家形土製品が7点ほど知られている（表3）。これらのうち、東日本の2点は切妻造で、中国地方の5点は入母屋造・寄棟造と考えられるものである。未だ数は少ないものの、このあり方は、先述の家形埴輪の中心的建物の地域差に対応しており、前方後円墳時代前半期の世界観の形成が弥生時代後期に遡ることを示唆するものとして重要である。なお、先述のように、近畿地方中期の独立棟持柱をもつ巨

表3 屋根型式の判明する弥生時代後期の家形土器・家形土製品

遺跡名	所在地	器種	時期	屋根	出土遺構	文献
子ノ神	神奈川県厚木市	台付家形土器	後期中葉	切妻	竪穴住居址	厚木市教育委員会 1990
鳥居松	静岡県浜松市	台付家形土器	後期中葉	切妻	水田	静岡県文化協会 2003
横寺	岡山県総社市	家形土製品	後期	入母屋	不明	三輪・宮本 1995
女男岩墳丘墓	岡山県倉敷市	家付器台形土器	後期終末	入母屋?	墳丘墓	間壁・間壁 1974
		家付器台形土器	後期終末	寄棟	墳丘墓	
雲山鳥打墳丘墓	岡山県岡山市	家付器台形土器?	後期終末	入母屋	墳丘墓	静岡県文化協会 2003
藤津	鳥取県東郷町	台付家形土器	後期終末?	入母屋	不明	間壁・間壁 1974

大な切妻造建物が、穀倉から発達した祭祀施設であり、平等志向の集落群のなかで重要な意味をもつものであるとするならば、後期になって同様の巨大な切妻式建物がみられなくなる点と、西日本の家形土器・土製品に切妻造が存在しなくなる点を、偶然の一致として片付けるわけにはいかなくなる。後期の独立棟持柱をもつ建物址が、琵琶湖南岸地域で独特の発達をみせる点についても、この地域の東海地方西部との関係を考慮して解釈し直す必要があるように思う。

以前筆者は、中期後葉において土器「絵画」が急速に発達したのは、この時期の近畿地方における櫛描文系器種から非櫛描文系器種への転換によって、櫛描文が意味していたものを、非櫛描文系器種に別のかたちで表現する必要性が生じたためと解釈した〔安藤 1999: 137 頁〕。中期後葉は、近畿地方を中心に東日本南部から中国・四国地方までの広範囲に展開していた櫛描文が、新たな装飾の体系である凹線文に転換されるとともに、石器の生産・流通システムや中期的な集落群の解体が始まる時期でもある。こうした時期に、大和盆地を中心に、「絵画」が急速に各地に広がるのは、鉄器をはじめとする生活必需品の外部依存性の高まりと、地域社会間関係の深化により、中心を希求する新たな社会的関係が形成されつつあるなかで、「絵画」の背景にあった人間の世界の平等性に基づく世界観を具象化し再確認しようとした現象として理解できるかも知れない。

また、後期の銅鐸において、「絵画」をもつ例が激減することにも注目しておく必要がある。特に近畿式銅鐸では、画題不明のものが1例みられるだけとなり、僅かに「絵画」が存在する三遠式では、ミズドリが中心になるなど画題に変化が認められる。こうした点からも、中期の銅鐸祭祀と結び付いていた、「絵画」で表現された世界観が、後期には受け継がれていなかった可能性を指摘することができる。

このように考えると、大和・河内地域、南関東地方等にみられた平等志向の地域社会が、弥生時代「絵画」にみられた人間の世界を平等的に描く世界観によって支えられており、一方で後期の中心形成志向の集落群の形成は、人間の世界の不平等性を容認する世界観と結び付いていたと想定することが可能になってくる。この想定が正しいとすれば、ここに、前方後円墳時代において階層的関係を視覚化・物象化する祭祀が急速に発達したことの観念的基盤の形成をみることができるのではないかと考えている。

④……………おわりに

以上、少々大胆な推測を重ねながらも、東日本南部以西の弥生文化の展開を、人口を含む物質的生産、権力の所在と絡んだ地域社会の形成と地域社会間関係の変化、世界観・イデオロギーの変質という3つの軸の絡み合いのなかで理解することを試みてみた。

弥生時代の東日本南部以西においては、水田稲作の展開に適した自然条件のもと、地域的な差異を含みつつも、生業システムにおける水田稲作の中心化、人口及び物質的生産量の増加、生活必需品の外部依存性の高まりが、一体的に進行していたものと考えられる。そのなかで、個々の集落の存在を支える相互依存的な地域社会が形成され、人口・物質的生産量の増加とともに、やがて地域社会の存在を支える地域社会間関係の役割が大きくなっていく。

こうした地域社会及び地域社会間関係には、集落間・地域社会間の平等的な関係を基盤とするようにみえる場合と、明確な中心的集落をもつ場合とが認められ、それをここでは平等志向と中心形成志向と呼び分けた。これら二つの志向性の展開は、大陸との近接性、地形、人口規模等の多様な条件に大きく左右されるものの、ある程度の広さの沖積地をもつ地域では、平等志向の集落群の形成が先行し、物質的生産量、外部依存性の高まりとともに、集団内外の諸矛盾に対処する中心が形成されるという流れになると考えることができる。

一方、世界観・イデオロギーに関しては、弥生時代における、人口の増加や社会的関係の変化の背景に、自然を超克しようとする意識を含む、直線的な時間意識と結び付いた世界観が絡んでいること、そしてそれは縄文文化の世界観からの変化というよりも、朝鮮半島無文土器文化に淵源を辿り得るものであることを推測した。さらに、大和・河内地域や南関東地方に平等志向の集落群が形成されていた中期において、人間の世界を平等的に描く「絵画」が存在しており、多くの地域が中心形成志向の集落群を形成する後期になって、人間の世界の不平等性を容認する世界観への変質が進んだこと、そしてそれが、その後の前方後円墳の成立と展開の基盤になったことを論じてみた。

先述のとおり、前方後円形墳丘墓・初期前方後円墳の成立は、それまでの弥生時代の地域社会間祭祀とは異なり、大和盆地に明確な中心を形成する点に特徴があった。以後、7世紀初頭までの、階層的な関係を基本とする前方後円墳の展開を考慮すれば、この時期における地域社会間の不平等的關係の視角化・物象化と一体となった社会的関係の成立を、時代の画期と評価することに何ら問題はないと考える。

ただし、前方後円墳時代前期においては、大和盆地における明確な中心の形成と、祭祀に参画した地域社会間の不平等的關係の視覚化・物象化が認められるとはいえ、地域社会間の関係が、依然祭祀の共有という等質的な側面を強く保持していたことも間違いないようである。前方後円形墳丘墓あるいは前方後円墳時代前期前半までの前方後円墳に、明確な地域社会間の不平等的關係が見られるのは、前方後円墳祭祀に参画した地域社会の数が限られていたことと関係していた可能性が高い。それ故に、東アジアの国際情勢も絡み、地域社会の多くが前方後円墳祭祀に参画することになった前期後葉において、大和・河内地域の複数の古墳群に大形前方後円墳が分散し、かつ東北地方～中国地方の広い範囲に、大和・河内地域のものと同等の規模の前方後円墳が形成されることに

なったのである。つまり、この時点では、肥大化した地域社会のまとまりを維持するためには、依然弥生時代的な平等志向の地域社会間関係が必要だったのであり、必ずしも大和・河内地域を中心とした地域社会の序列の視覚化・物象化を徹底して行い得るような階層的な社会構造が確立していたわけではなかったのである。

引用・参考文献

- 青柳泰介 1998「家形埴輪配置考」『古代学研究』141, 古代学研究会, 47-54 頁
- 青柳泰介 2000「家形埴輪と大型掘立柱建物との関係について—平面形態の比較を中心に—」『古代学研究』150, 古代学研究会, 135-142 頁
- 秋山浩三 2007『弥生大型農耕集落の研究』青木書店
- 秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18冊
- 厚木市教育委員会 1990『子ノ神(Ⅲ)』
- 安藤広道 1997「南関東地方石器—鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館研究紀要』第2号, 1-32 頁
- 安藤広道 1998「相模川流域における宮ノ台式期の集落」『考古論叢神奈河』神奈川県考古学会, 15-38 頁
- 安藤広道 1999「弥生土器の「絵画」と文様—横浜市折本西原遺跡出土「絵画」土器の紹介をかねて—」『古代』106号 早稲田大学考古学会, 115-139 頁
- 安藤広道 2002a「異説弥生畑作考」『西相模考古』11号 西相模考古学研究会, 1-56 頁
- 安藤広道 2002b「地域を越えた様相 関東」『弥生時代のヒトの移動—相模湾から考える』考古学リーダー1 西相模考古学研究会 六一書房, 111-125 頁
- 安藤広道 2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造—東京湾西岸地域における地域社会の一位相—」『考古学研究』第51巻第1号 考古学研究会,
- 安藤広道 2006a「弥生時代「絵画」の構造」『原始絵画の研究 論考編』六一書房, 39-71 頁
- 安藤広道 2006b「角のないシカ, 角のあるシカ」『みずほ』第40号 大和弥生文化の会, 95-99
- 安藤広道 2007「東アジアの視点からみた縄文時代・弥生時代の農耕」『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』日本考古学協会2007年度熊本大会実行委員会, 432-451 頁
- 安藤広道 2008「横浜市日吉台遺跡群」『新神奈川・新弥生論』平成19年度考古学講座 神奈川県考古学会, 79-88 頁
- 安藤広道・津村宏臣 2006「DEMによる弥生時代集落遺跡立地の分析」『実践考古学GIS』NTT出版, 269-287 頁
- 石川日出志 1992「遺跡密度」『図解 日本の人類遺跡』日本第四紀学会編 東京大学出版会, 128-131 頁
- 石川日出志 2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号 駿台史学会, 57-93 頁
- 和泉市教育委員会 1998『史跡池上曾根96』
- 市村慎太郎 1996「天理市長寺遺跡出土の絵画土器」『みずほ』18号 大和弥生文化の会, 40-41 頁
- 伊藤淳史 2005「国家形成前夜の遺跡動態」『国家形成の比較研究』前川和也・岡村秀典編 学生社, 282-303 頁
- 稲築町教育委員会 1989『沖出古墳』
- 尹 武炳 1991『韓國青銅器文化研究』
- 宇治市教育委員会 1990『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』
- 梅木謙一・三吉秀充 2006「瀬戸内沿岸地域の絵画土器集成」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会, 279-284 頁
- エリアーデ・ミルチャ 1963『永遠回帰の神話』堀一郎訳 未来社
- 財大阪市文化財協会 1990『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 財大阪市文化財協会 1991『長原遺跡Ⅳ』
- 小笠原好彦 1985「家形埴輪の配置と古墳時代豪族の居館」『考古学研究』第31巻第4号, 考古学研究会, 13-28 頁
- 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー66 吉川弘文館
- 小沢佳憲 1999「玄界灘沿岸地域における中期から後期の集落動態」『弥生時代の集落—中・後期を中心として—発表要旨集』第四回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会, 83-103 頁
- 小沢佳憲 2000「集落動態からみた弥生時代前半期の社会—玄界灘沿岸域を対象として—」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会, 1-42 頁
- 加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』

-
- 片岡宏二 1999『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣
- 金関 恕 1985「弥生土器絵画における家屋の表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館, 63-77 頁
- 鬼頭清明 1982「原始経済の発展」『日本経済史を学ぶ 上』有斐閣, 1-27 頁
- 君津市教育委員会 1996『常代遺跡群』
- 木村重信 1999『美術の始源』木村重信著作集第1巻 思文閣出版
- 京都帝国大学文学部考古学研究室 1937『大和唐古彌生式遺蹟の研究』奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告第16冊
- 車崎正彦 2000「家屋文鏡再読」『2000年度日本建築学会大会（東北）建築歴史・意匠部門研究協議会資料』日本建築学会, 25-32 頁
- 慶尚大学校博物館 1999『晋州 大坪里 玉房 2地区 先史遺蹟』慶尚大学校博物館研究叢書第20輯
- 考古学研究会岡山例会委員会編 1999『シンポジウム記録1 論叢古備』
- 黄壽永・文明大 1984『盤亀台岩画彫刻』東國大學校
- 國立中央博物館・國立光州博物館 1992『特別展 韓國의青銅器文化』汎友社
- 国立歴史民俗博物館 1997『銅鐸の絵を読み解く』小学館
- 後藤守一 1933『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』皇室博物館報告第6冊
- 後藤守一・相川龍雄 1936『多野郡平井村白石稲荷山古墳』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第3輯
- 後藤 直 2004「植物質食料—弥生時代と無文土器時代農耕の比較のために—」『東アジア先史時代における生業の地域間比較研究』平成12（2000）年度～15（2003）年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室, 57-164 頁
- 小林行雄 1951『日本考古学概説』創元選書218 東京創元社
- 小林行雄 1959『古墳のはなし』岩波新書
- 小柳敦史 1998「深さの定量化による作物根系の新しいとらえかた」『日本作物学会紀事』第67巻第1号, 3-10 頁
- 小柳美樹 1999「稲と神々の源流—中国新石器文化と稲作農耕—」『食糧生産社会の考古学』現代の考古学3 常木晃編 朝倉書店, 72-99 頁
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎・他 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 酒井龍一 1974「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』第21巻第2号 考古学研究会, 23-36 頁
- 酒井龍一 1984「弥生中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『奈良大学文化財学報』第三集, 37-51 頁
- 佐々木高明 1971『稲作以前』NHKブックス 日本放送出版協会
- 佐原 真 1968「日本農耕起源論批判—『日本農耕文化の起源』をめぐる—」『考古学ジャーナル』No23 ニューサイエンス社, 2-11・20 頁
- 佐原 真 1980「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会, 102-117 頁
- 佐原 真 1982「三十四のキャンパス—連作四銅鐸の絵画の「文法」—」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社, 245-280 頁
- 滋賀県教育委員会 2006『竜ヶ崎A遺跡』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書
- 下條信行 1975「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』第22巻第1号 考古学研究会
- 下條信行 1991「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」『児島隆人先生喜寿記念論集 古文化論叢』, 77-106 頁
- シャルボニエ・ジョルジュ 1970『レヴィ=ストロースとの対話』多田智満子訳 みすず書房
- 昭和女子大学歴史文化学科中屋敷遺跡調査団 2005『中屋敷遺跡 弥生時代前期のイネと土坑群』
- 杉原莊介 1967「登呂遺跡水田址の復元」『案山子』第2号 日本考古学協会生産技術研究特別委員会農業部会連絡紙, 3-7 頁
- 高木暢亮 2003『北部九州における弥生時代墓制の研究』九州大学出版会
- 武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット3 山川出版社
- 地村邦夫 2001「拠点集落の解体」『平成13年度春季特別展 弥生都市は語る 環濠からのメッセージ』大阪府立弥生文化博物館, 100-103 頁
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 寺沢 薫 2000『王権誕生』日本の歴史第02巻 講談社
- 寺前直人 2006「生産と流通からみた畿内弥生社会」『畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備社会・古代山陽道をめぐる諸問題』シンポジウム記録5 考古学研究会, 105-122 頁
-

-
- 東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇（関東Ⅱ）』1-295 頁
- 富永建一 1996『近代化の理論』講談社学術文庫
- 中西靖人 1984「前期弥生ムラの二つのタイプ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所, 120-126 頁
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986『特別展 絵画と記号—唐古・鍵遺跡調査 50 周年記念—』
- 羽曳野市教育委員会 1980『古市遺跡群Ⅱ』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 5
- 財浜松市文化協会 2002『鳥居松遺跡—3 次調査—』
- 春成秀爾 1997「精霊の絵」『歴史発掘⑤ 原始絵画』講談社, 55-71 頁
- 春成秀爾 2003「井向 1・2 号銅鐸の絵画」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』5 財辰馬考古資料館, 55-84 頁
- 春成秀爾 2007「弥生青銅器の成立年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集 国立歴史民俗博物館, 135-156 頁
- 兵庫県立歴史博物館 1995『兵庫の弥生土器』歴史博物館教育資料VOL. 1
- 広瀬和雄 1997「縄紋時代に稲作はあった」『縄紋から弥生への新歴史像』角川書店, 30-51 頁
- 広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第 45 巻第 3 号 考古学研究会, 34-56 頁
- 藤尾慎一郎 1993「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 48 集 国立歴史民俗博物館, 1-65 頁
- 藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘 2006「弥生時代の開始年代—AMS—炭素 14 年代測定による高精度年代体系の構築—」『弥生時代の新年代』新弥生時代のはじまり第 1 巻 西本豊弘編 雄山閣, 7-28 頁
- 藤田三郎 1999「奈良盆地における弥生遺跡の実態」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ, 135-148 頁
- 保坂康夫・他 2008「山梨県酒呑場遺跡の縄文時代中期の栽培ダイズ」『研究紀要』24 山梨県立考古学博物館・山梨県埋蔵文化財センター, 23-34 頁
- 間壁忠彦・間壁霞子 1974「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第 10 号 倉敷考古館, 13-49 頁
- 町田 章 1987「中国と朝鮮の稲作」『稲のアジア史』第 3 巻 アジアの中の日本稲作文化—受容と成熟— 小学館, 99-138 頁
- 松坂市教育委員会 2005『史跡宝塚古墳』松坂市埋蔵文化財報告書 1
- 松中照夫 2003『土壌学の基礎 生成・機能・肥沃度・環境』農文協
- 三重県埋蔵文化財センター 2005『石山古墳』第 24 回三重県埋蔵文化財展
- 溝口孝司 1999「権力」『用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅰ』同成社, 35-40 頁
- 宮本一夫 2000「縄文農耕と縄文社会」『古代史の論点 1 環境と食糧生産』佐原真・都出比呂志編 小学館, 115-138 頁
- 宮本一夫 2003 a「膠東半島と遼東半島の先史社会における交流」『東アジアと「半島空間」—山東半島と遼東半島—』思文閣出版, 3-20 頁
- 宮本一夫 2003 b「朝鮮半島新石器時代の農耕化と縄文農耕」『古代文化』第 55 巻第 7 号 財古代学協会, 1-16 頁
- 三好孝一 1999「河内湖周辺部における弥生時代中・後期の集落」『弥生時代の集落—中・後期を中心として— 発表要旨集』第四五回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会, 9-16 頁
- 三輪嘉六・宮本長二郎 1995『家形埴輪 日本の美術 5 No.348 至文堂
- 弥栄町教育委員会 1988『ニゴレ古墳』弥栄町文化財調査報告第 5 集
- 安永寿延 1959「古代的心性」『日本文学』第 8 巻第 14 号, 1-13 頁
- 山崎純男 2003「西日本の縄文後・晩期の農耕再論」『大阪市学芸員等共同研究 朝鮮半島と日本の相互交流に関する総合学術調査—平成 14 年度成果報告—』大阪市学芸員等共同研究実行委員会, 48-69 頁
- 山崎純男 2005「西日本縄文農耕論—種子圧痕と縄文農耕の概要—」『韓・日新石器時代の農耕問題』第 6 回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料 財慶南文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会, 59-68 頁
- 山崎頼人 2006「和泉南部地域における弥生集落研究の現状と課題」『みずほ』第 40 号 大和弥生文化の会, 119-140 頁
- 山田昌久 1986「くわとすきの来た道」『新保遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査事業団, 168-188 頁
- 大和弥生文化の会 1995『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』
- 大和弥生文化の会 2003『奈良県の弥生土器集成』
- 吉崎昌一 1995「日本における栽培植物の出現」『季刊考古学』50 雄山閣, 18-24 頁
- 吉留秀敏 1999「福岡平野の弥生社会」『シンポジウム記録 1 論叢吉備』考古学研究会岡山例会委員会, 57-80 頁
- 若林邦彦 2001 a「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に」『日本考古学』第 12 号, 日本考古学協会, 35-54 頁
- 若林邦彦 2001 b「弥生～古墳時代における製作途上木製品の出土傾向—鉄器普及との関連—」『大阪府文化財研究』
-

第20号 大阪府文化財協会, 41-50 頁

若林邦彦 2006 a 「丘陵上の弥生集落と複合社会の拡大—近畿地方の事例から—」『古代文化』第58巻第Ⅱ号 財団法人古代学協会, 96-105 頁

若林邦彦 2006 b 「集落からみた「畿内」社会—「基礎集団」をキーワードに—」『畿内弥生社会像の再検討・「雄略朝」期と吉備社会・古代山陽道をめぐる諸問題』シンポジウム記録5 考古学研究会, 59-84 頁

若林邦彦 2007 「集落分布パターンの地域性と弥生社会」『考古学に学ぶ(Ⅲ)』同志社大学考古学シリーズⅨ, 153-166 頁

若松良一 2004 「狩猟を表現した埴輪について」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武蔵古代文化研究会, 113-173 頁
※第6～8図の作成には、杉本智彦『カシミール3D』を使用。

(慶應義塾大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年9月30日受理, 2009年1月21日審査終了)

Production, Power and Ideology in the Yayoi Period

ANDO Hiromichi

The aim of this paper is to understand the cultural and social process of Yayoi culture in west Japan and the southern part of east Japan as the dialectic interactive process between the following three dimensions, production dimension including population (production), social relationships dimension (power) and world view dimension (ideology). Based on the author's previous studies, the author described the production dimension as the changes of subsistence system and population by the analysis of agricultural remains and by the demographical analysis of settlement sites, described the social relationship dimension as the changes of social relationships both within and outside local communities by the analyses of stone and iron tools distribution and settlement pattern. And the world view dimension was described as the change of view of the relation between nature and human by the analysis of drawings on ceramics and bronze objects.

The study's findings reveal that during Yayoi period, which was a natural and historical environment unique to west Japan and the southern part of east Japan, development of subsistence systems centered on wet rice cultivation, rapid and continuous population increases, development of large settlements and settlement complexes corresponding to local communities, and the formation of a world view, which were based on a linear sense of time and non-egalitarian view of world that sought to control part of nature with water (rice paddies), evolved while interacting with one another.

In the study of settlement site complexes, the author focused on the formation of reciprocal communities and the process of the development of relationships among communities while taking the system of material production, including population, into consideration. This study revealed that there existed cases where egalitarian relationships were sought among settlements and local communities, and cases of the formation of a well-defined center. Broadly speaking, the settlements complexes, which were egalitarian oriented, came first mainly in Middle Yayoi, and then the formation of a center occurred mainly in Late Yayoi along with increased production forces and external dependence of necessities in particular iron tools. Overlaying this with the analysis of drawings revealed that in Middle Yayoi, a time when there were egalitarian oriented settlements complexes widely, there was a tendency to portray the human world equally. By Late Yayoi, by

which time most regions were oriented toward the formation of a center, there had been a shift to a world view that accepted inequality in the human world, as seen in appearance of mound burials and the extended reproduction of large bronze ceremonial goods.

By looking at the dialectic interaction between material production dimension, social relationships dimension, and world view dimension of Yayoi culture in this way, we are presented with a new interpretation regarding the cultural and social process in Yayoi period and the shift to Keyhole-shaped mounded tomb period.

Key words: Yayoi culture, population, subsistence, social relationships, world view